文學博士 南條文雄
文學博士 井上圓了 監修

宮内省圖書寮

明治
39 3 13
受入

京都 法藏館發行

71
689

凡例

一本寶典は、佛祖歷代の聖訓たる淨土三部經七祖聖敎敎行證文類淨土文類聚鈔愚禿鈔和讃御文章改悔文御假名聖敎六要鈔會本敎名集の肝要なる諸文を目次の各題下に摘錄したるものにして、編纂の用心、聊か宗義研究布敎傳道に從事する人、幷に、信念修養に志せる人のために資する所あらんことを期せり

一宗義研究に從事する人のために、特に其要旨を知るに便なる冠註を附し、更に例へば、名號の意義、信心の意義等の

如く、各節の下にそれ〳〵何々の意義なる項を設けて、一見各題目の大旨を悟了し易からしめんことを勉めたり

一布教に從事する人、幷に、信念の修養をなす人のために、引文には、特に信念の實感、難信の理由、念佛の意相、譬喩訓誡等に關する懇切なる聖訓を附加せり

一眞實方便の二門は、其教相を說示するや、固より甲乙を附すべきものにあらざると雖も、今便宜のため、大体眞實門を以て一貫し、附錄として方便門を擧ぐることゝせり、蓋し此二門は義理複雜にして、合說するときは讀者をして往々混亂せしむる虞あればなり、且つ吾人の信念を確立せんには、方便門は其用少く、主として眞實門に據るべければなり

一例へば、第十八願成就の文の如き、其他須要の文往々各節下に數回之を引用せり、讀者一見或は重複の感を惹起せん蓋しこれ各題目につき各其本據を知らしめんために殊更に繁を厭はざ引用せしなり

一引文は概して原文の儘なれども、往々難字を假名に復し或は長を短縮したる所なきにあらざ、されど其原文の意義は毫も變改せざ

一振假名は大体は從來の讀み慣はしに從ひ、吳音を用ゐたれども、時に或は文字に拘泥せざ、文意に依て附せるあり、

又或は漢音に依れるあり、これ僧俗を問はず一般に了解し易からしむるを主意としたればなり

一本寶典は、引用書中肝要なる諸文は略ほ之を引用したるも其卷數の多き尚ほ聖訓の引用すべきもの尠しとせず、且つ或は校合の誤れるものあらん、版を重ぬるに隨ひ漸次增補修正する所あらんことを期す

明治三十九年一月二十八日

編者識す

真宗寶典目次

第壹　序編……一

第一章　出世の本意……一

第二章　正依の經典……一〇

第三章　佛教の分類……二〇

（附）　方便の二門……四四

第貳　宗義要旨編……五一

第一章　總說……五一

第二章　佛陀……五九
第一節　彌陀……五九
第一項　彌陀の意義……五九
第二項　誓願と慈悲……六五
（一）須要の誓願……六五
（二）萬機の救濟……六九
（附）方便の誓願……七九
第三項　誓願の成就……八四
（一）願成就の證……八四
（二）成佛の時節……九一

（附）方便願の成就……九五
第四項　佛身……一〇二
（一）法身……一〇三
（二）光明……一一〇
（三）壽命……一二四
（四）佛德……一三三
（附）方便化身……一三九
第二節　極樂……一四四
第一項　極樂の意義……一四四
第二項　眞實報土……一四九

第三項　無比の淨土……一五三
第四項　方位廣狹……一五五
第五項　無爲涅槃界……一六四
（附）　方便化土……一七〇
第三節　名號……一七三
第一項　名號の意義……一七三
第二項　願行具足……一八一
第三項　機法一體……一八五
第四項　佛の勅命……一八七
第五項　名號の德……一九〇

第六項　往生の正因……二〇二
第七項　光明と名號……二〇六
第八項　誓願と名號……二二三
第三章　衆生……二二四
第一節　機相……二二四
第一項　無常……二二四
第二項　人身……二二七
第三項　罪惡……二四五
第四項　業報……二五五
第五項　輪廻……二五九

第六項　誓願の正機……二六三
（一）　惡機……二六三
（二）　女子……二七八
（附）　方便門の機……二八四
第二節　信心……二八六
第一項　信心の必要……二八六
第二項　信心と知識……二九三
第三項　信心の意義……二九八
第四項　成佛の眞因……三一六
第五項　信心教示の左右……三二三

（一）　信受本願の教示……三三三
（二）　聞信名號の教示……三四〇
（三）　一心歸命の教示……三五二
（四）　二種深信の教示……三五八
（五）　二力廢立の教示……三六五
第六項　他力の廻向……三九二
第七項　宿善の開發……三九六
第八節　知識の化導……四〇六
第九項　難信の所由……四一四
（附）　方便門の信と行……四二五

第三節　利益……四三六
第一項　現在の利益……四三六
（一）現益の意義……四三六
（二）正定聚の益……四四一
（三）心多歡喜の益……四六一
（四）心光攝護の益……四六八
（五）至德具足の益……四七四
（六）轉惡成善の益……四七六
（七）他力の廻向……四八二
（附）方便門の現益……四八四

第二項　未來の利益……四九一
（一）當益の意義……四九一
（二）難思議往生……四九七
（三）平等の證悟……五〇三
（四）利他教化……五一四
（五）他力廻向……五一九
（附）方便門の往生……五二四
第四節　行業……五二一
第一項　行業の意義……五二一
第二項　報恩の稱名……五二九

第三項　稱名の意相……五五一
第四項　作業の修法……五六〇
第五項　自信教人信……五六二
第六項　師恩の報謝……五七一
第七項　報恩の勵修……五八二
第八項　他力の行業……五九三
第五節　處世……五九八
第一項　自己に對する德義……五九八
（一）　總說……五九九
（二）　反省……六〇九

（三）　誠實……六一三
（四）　愼言……六一五
（五）　制欲……六一九
（六）　懺悔……六二三
（七）　勤勉……六二六
（八）　節約……六二九
（九）　冥加……六三三
第二項　他人及社會に對する德義……六三四
（一）　總說……六三五
（二）　奉公……六四〇

目次終

(三) 孝養……六四七
(四) 敬順……六五二
(五) 交際……六五八
(六) 慈愛……六六四

真宗寶典

第一章　序編

出世の本意

佛の世に出で給ひし本懷

如來無蓋の大悲を以て三界を矜哀みたまふ、世に出興たまふ所以は、道教を光闡めて群萌を拯ひ、恵むに眞實の利を以てせんと欲してあり、無量億劫にも値ひ難く見奉り難し、猶靈瑞華の時ありて時に乃し出るがごとし。

（無量壽經）

釋迦の出現は五濁の凡夫を度せんが爲めあり、則

慈悲を以て十惡の因の三塗の苦を報果ることを開示し、又平等の智慧を以て、人天回して彌陀の佛國に生ぜることを悟入らしめ給ふ。（觀念法門）

●釋迦世に出興たまふは、道教を光闡めて群萌を拯ひ、惠むに眞實の利を以てせんと欲してあり。（教行證文類）

●如來世に興出たまふ所以は、唯彌陀の本願海を說かむとおもへり。（正信念佛偈）

●出世本懷の義を論ずるに略して二意あり、一には教の權實に約す、三乘は是れ權、一乘は是れ實、

故に一乘を以て說て本懷とおす、是れ法華の意おり、二には機の利鈍に約す、般舟讃に云く根性利おる者は皆益を蒙むる、鈍根無智あれば開悟し難しと。玄義に云く、諸佛の大悲は苦者に於てす、心偏へに常沒の衆生を愍念したまふ、是を以て勸めて淨土に歸せしむ、亦水に溺れたる人の如きは急に須く偏に救ふべし、岸上の者をば何を用てか濟ふことをせんと、大悲の本懷唯障重く根鈍く常沒の衆生を濟度するにあり、而るに利根は少く鈍根の者は多し、故に知りぬ諸教の出離は是れ

少く、浄土の得脱は其機是れ多しといふことを、此道理に依れは施す所の利益諸教に超過せり、浄土の教門豈に本懐に非ざや、故に大経に云く、如來の智慧海は深廣にして涯底なしと蓋し此意なり慈悲深重にして悪機を救度ふ、故に説て深とあす利益廣大にして普く群機に被らしむ、故に説て廣とあす。

（六要鈔會本）

●如來興世の本意には、本願眞實ひらきてぞ、難値難見とときたまひ、猶靈瑞華としめしける。

（和讃）

●經道滅盡ときいたり、如來出世の本意ある、弘願眞宗にあひぬれは、凡夫念じてさとるあり。

（和讃）

●本願の文に乃至十念とちかひたまへり、この誓願はすなはち易往易行のみちをあらはし、大慈大悲のきはまりなきことをしめしたまふなり、阿彌陀經に一日乃至七日、名號をとなふへしと、釋迦如來ときたまへる御のりなり、この經は無問自説經とまうす、この經をときたまひしに、如來にとひたてまつる人もなし、これすなはち釋尊出

世の本懷をあらはさんとおぼしめすゆへに無問自説とまふすあり、彌陀選擇の本願、十方諸佛の證誠、諸佛出世の素懷、恒沙如來の護念は諸佛咨嗟の御ちかひをあらはさんとあり。（一念多念證文）

●諸佛の世に出でたまふ本意とまふすを直説といふあり、大經には如來世に興出たまふ所以は、群萌を拯ひ、惠むに眞實の利を以てせんと欲ぼしてありとのたまへり、然れば諸佛の世にいでたまふゆへは、彌陀の願力をときて、よろづの衆生をめぐみ、すくはんとおぼしめすを本懷とせんとしたまふがゆへに、眞實の利とはまうすあり、しかればこれを諸佛出世の直説とまうすあり、おほよそ八萬四千の法門は、みなこれ淨土の方便の善あり、これを要門といふ、これを假門とあづけたり、諸佛出世の直説、如來成道の素懷は、凡夫は彌陀の本願を念ぜしめて、即生するをむねとすべしとあり。（一念多念證文）

●海德佛よりこのかた釋尊までの説教、出世の本意久遠實成の彌陀のたちとより、法藏正覺の淨土教のおこるをはじめとして、衆生濟度の方軌とさだ

めて、この淨土の機をとゝのほらさるほど、しばらく在世の權機に對して、方便の教として、五時の教をときたまへりとしるべし、たとへば月まつほとの手ぜさみの風情あり、いまの三經をもて、末世造惡の凡機にとききかせ、聖道の諸教をもてはその序分とすること、光明寺の處々の御釋に歴然たり、こゝをもつて諸佛出世の本意とし、衆生得脫の本源とする條わきらかあり。（口傳鈔）

出世の本懷をあらはす文といふは、大經には如來以無盡大悲矜哀三界、所以出興於世、光闡道教、欲拯群萌、惠以眞實之利といへり、觀經には、釋迦牟尼佛、能爲甚難希有之事、能於娑婆國土、五濁惡世、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁中、得阿耨多羅三藐三菩提、爲諸衆生、說是一切世間難信之法、といへり、出世の元意あること明かあり、また三部經のみならず、餘經の中にもその文證あり、いはゆる六字神呪經に、如來の本意他事に非ず、五濁に出現したまふは、念佛往生の門を說かんが爲めありといへ

り、分明の文あり。

（決智鈔）

●秘密神呪経には三世の諸佛出世の本懷は、阿彌陀佛の名號を說かんがためあり。

（嘉歸繪詞）

●唯說彌陀本願海といふは、諸佛の世にいでたまふ御本懷はひとへに願海一乘の法をとかんとあり。

（尊號眞像銘文）

●然ば淨土眞宗をば出世の本意とす、されば三經の中の大無量壽經の說相にそのむね歷然あり。

（出世元意）

第二章　正依の經典

眞宗正依の經典三部經是なり

●顯淨土眞實敎文類一、愚禿釋親鸞集、大無量壽經（眞實之敎淨土眞宗）

顯淨土方便化身土文類六本、愚禿釋親鸞集、至心發願之願（邪定聚の機、雙樹林下往生、無量壽佛觀經之意也）至心回向之願（不定聚の機、難思往生、阿彌陀經之意也）

（敎行證文類）

●往生淨土を明ずの敎とは、謂ゆる三經一論是あり、三經とは、一には無量壽經、二には觀無量壽經、三には阿彌陀經あり、一論とは天親の往生論經、是あり、或は此三經を指して淨土の三部經と號す

彌陀の三部とは是れ淨土の正依經あり。（選擇集）

●眞實の教といふは、彌陀如來の因位果位の功德をとき、安樂淨土依報正報の莊嚴ををしへたる教あり、すなはち大無量壽經これあり、總じては三經にわたるべしといへども、別しては大經をもて本とす、これすなはち彌陀の四十八願をときて、その中に第十八の願をもて衆生生因の願とし、如來甚深の智惠海をあかして、唯佛獨明了の佛智をときのべたまへるがゆへなり。（教行信證大意）

●夫れ眞實の教を顯はすとは則大無量壽經是あり。斯の經の大意は、彌陀誓を超發して廣く法藏を開き、凡小を哀れみ、選みて功德の寶を施すことを致す、釋迦世に興出し給ひて、道教を光闡め群萌を拯ひ、惠むに眞實の利を以てせんと欲してあり、是を以て如來の本願を說くを經の宗致とし、卽佛の名號を以て經の體とするあり。（教行證文類）

●易行淨土、本願眞實之教、大無量壽經等也、易行道、淨土要門、無量壽佛觀經之意、定散三福九品之教也（眞秀鈔）

●然るに今大本に據るに、眞實方便の願を超發す、亦觀經には方便眞實の教を顯彰す、小本には唯眞門を開ひて方便の善とおし、是を以て三經の眞實は選擇本願を宗とおすなり、復三經の方便は卽ち是れ諸の善根を修するを要とおすなり。

（教行證文類）

●ひはゆる三經の說時をいふに、大無量壽經は法の眞實あるところをときあらはして、對機はみな權機あり、觀無量壽經は機の眞實あるところをあらはせり、これすなはち實機なり、ひはゆる五障の女人、韋提をもて對機として、ときく末世の女人惡人にひとしむるなり、小阿彌陀經はさきの機法の眞實をあらはすに、二經を合說して、不可以少善根、福德因緣、得生彼國ととける、無上大利の名願を一日七日の執持名號にむすびとゝめて、こゝを證誠する諸佛の實語を顯說せり、これによりて世尊說法時將了と釋（光明寺）しまします、一代の說敎むしろをまきし肝要、いまの彌陀の名願をもつて付屬流通の本意とする條、文にありてみつべし。

（口傳鈔）

佛說無量壽經の大意といふは、この經には能化古今の本末をあかし、所化往生の首尾をとく、乃往過去のむかし、久遠發心のいにしへ、十善王位をあげすてゝ、世饒王佛の寶前にまうで、四海の寶國をすてゝ、法藏沙門の尊號をゑたり、二百億の莊嚴をゑらびて、四十八の弘誓をおこし、六度四攝の行因を修して、三身萬德の佛果を證す、五劫思惟のむかしの密意、十劫已來のいまの妙果にあらはる、修諸功德の水三輩修行のかげをうかべ、本願往生の月、一向專念のまどをてらす、教主

釋尊は橫截五惡のとき、高祖和尚は超斷四流と釋す、經のはじめには阿難正旨をうけて、莊嚴淨土の由序をおこし、經のをはりには彌勒付屬をうけて、念佛往生の流通をつのる、これ一經の元意二佛の素懷なり、大意かくのごとし、佛說觀無量壽經の大意といふは、この經は三世の諸佛、淨業の正因をあかし、五濁の凡夫往生の功德をとく、十三の妙觀をこらし、三九の行因を修し、禪定の水靜かにして、依正かげをうかべ、散善の花ほころびて、薰修このみをむすぶ、經のはじめには、

しばらく、隨他意語の機に約して、ひろく定散の二善をとき、經のをはりには、ことに隨自意語の人をゑらびて、たゞ持名の一行をとく、如來は梵音和雅の聲をいだして、決定往生の佛名をゆづりたまひ、阿難は憶持不妄のいたゞきをたれて、一向にもはら彌陀佛のみなを稱せしむるにあり、この經の大意かくのごとし、佛說阿彌陀經の大意といふは、はじめには極樂の依正二報の莊嚴をあかし、のちには末代の行者、往生の行相をとく、いはゆる法性眞如の大地には、黃金瑠璃のかゞみ

かげをうつし、第一義諦の虛空には曼陀曼珠の花にほひをはく、六十萬億の身量は金山のごとくして高々たり、八萬四千の相好は珂月にて明々たり、觀音は日光のごとくして左面にひざまづき、勢至は月輪にひとしくして右脇に侍す、七日口稱の念佛は上品信心のひかりをあらはし、六方舌相の證誠は下根疑惑のやみをはらふ、彌陀の弘誓は六八ありといへども、行者の至要は一二にあり、至心信樂は第十八の願、住正定聚は第十一の願あるがゆへあり、大意かくのごとし。（古德傳）

●三經の大綱顯彰隱密の義ありと雖も、信心を彰はして、能入とあす、故に經の始に如是と稱す、如是の義は則善く信ぎる相あり、今三經を按ぎるに皆金剛の眞心を以て最要とあす、眞心は卽ち是れ大信心あり、大信心は希有最勝眞妙淸淨あり、何を以ての故に大信心海は甚だ以て入り難し、佛力より發起するが故に、眞實の樂邦甚だ以て往き易し、願力によりて卽生ぎるが故に。

（敎行證文類）

第三章　佛敎の分類

宗祖の佛敎の分類

●凡そ一代の敎に就て、此界の中に於ける入聖得果を聖道門と名く、難行道と云ふ、此門の中に就て大小、漸頓、一乘二乘三乘、權實、顯密、竪出、竪超あり、則ち是れ自力利他敎化地方便權門の道路あり、安養淨刹に於ける入聖證果を淨土門と名く、易行道と云ふ、此門の中に就て橫出、橫超假眞、漸頓、助正、雜行、雜修、專修あり。

（敎行證文類）

●竪超とは大乘眞實の敎あり、竪出とは大乘權方便の敎二乘三乘迂回の敎あり、橫超とは卽ち願成

就一實圓滿の眞教、眞宗是あり、亦復横出あり、即ち三輩九品定散の教、化土懈慢迂廻の善あり、大願清淨の報土には品位階次を云はゞ、一念須臾の頃、速疾に無上正眞道を超證す、故に横超といふあり。

（教行證文類）

●聖道淨土の教に就て二教あり、一には大乘教、二には小乘教あり、

大乘教に就て二教あり、一には頓教、二には漸教

頓教に就て復二教二超あり、

二教とは、一には難行聖道の實教あり、所謂佛心、眞言、法華、華嚴等の教あり、二には易行淨土本願眞實の教、大無量壽經等あり、

二超とは、一には竪超（即身是佛、即身成佛等の證果也）二には横超（選擇本願、眞實報土、即得往生也）

漸教に就て復二教二出あり、

二教とは、一には難行道、聖道權教、法相等歷劫修行の教也、二には易行道、淨土の要門、無量壽佛觀經の意、定散三福九品の教也、

二出とは、一には竪出、聖道歷劫修行の證也、

二には横出、浄土胎宮、邊地懈慢の往生也、

小乘經に就て二教あり、

一には緣覺教（一に麟喩獨覺、二に部行獨覺）、

二には聲聞教（初果、預流向、第二果、一來向、第三果、不還向、第四果、阿羅漢向、八輩也）

唯阿彌陀如來選擇本願を除て、已外の大小、權實、顯密の諸教皆是れ難行道、聖道門あり、又易行道淨土門の教、是を淨土廻向發願自力方便の假門と曰ふ。

（愚禿鈔）

何なか聖道門淨土門といふや

◉もろ〳〵の聖道門の諸教のこゝろは、この父母所生の身をもて、かのふかきさとりを、こゝにてひらかんとねがふあり、いま淨土門のこゝろは、彌陀の佛智に乘じて、法性の土にいたりぬれば、自然にこのさとりにかあふといふあり、此土の得道と他土の得生とことなりといへども、うるところのさとりは唯一つあり、しるべし、されば往生といへるも實には無生あり、この無生のことはりをば、安養にいたりてさとるべし、そのくらゐをさして眞實の證といふあり。

（教行信證大意）

◉聖道門といふは、この娑婆世界にありて、行を立

て功をつみて今生に證をとらむとはげむあり、いまの世にこの門をつとむる人は、即身の證に於ては自ら退屈の心をおこして、あるひははるかに慈尊の下生を期して、五十六億七千萬歳のあかつきのそらをのぞみ、あるひはわづかに靈山補陀落の靈地をねがひ、あるひはふたゝび天上人間の小報をのぞむ、結縁まことにたふとむべけれども、速證すでにむあしきにたり、淨土門といふは今生の行業を回向して、順次生にむまれて、淨土にして菩薩の行を具足して、佛にあらむと願ぜるあり、この門は末代の機にかあへり、まことにたくみありとす。（唯信鈔）

一代を分別するに二種あり、一には聖道、二には淨土あり、かの聖道門といふは智慧をきはめて生死をはなる、淨土門といふは愚痴にかへりて極樂にむまる、二門ともに一佛の所說ありといへども廢立參差し天地懸隔る、これすなはち大聖の善巧利生方便あり、常途の教義をもてみだりがはしく難ぜべからぜ。（古德傳）

化前發起の二別といふは、一代化前の諸教は聖人

を益し、觀經所説の念佛は凡夫を攝すといふことあり、これすなはち釋尊出世して、八萬四千の法門をときたまふことは、三乘五乘をしておなじく一實眞如の理性を覺らしめむがためあり、しかるに根性利鈍あるものはみな益をゑんかども、鈍根無智のものは開悟しがたきがゆへに、かの劣機のために淨土の門をひらきて、佛の願力に乘じて淨土に生じ、淨土にして無生のさとりをうべしとしめすなり、この義玄義の序題門にみへたり、すなはち眞如廣大なり、五乘もその邊をはからぜ、法性深高なり、十聖もその際をきはむることなしといひて、しかもその眞如の理性は蠢々の心をいでぜ、凡聖齊圓なりと釋してのち、但し垢障覆深なるをもて、淨體顯照するにより、しなしといひて、この淨體をあらはさむがために、大悲西化をかくして、おどろきて火宅の門にいるといふ以下は、釋尊出世の元意を叙し、一代五乘の説教をわくるなり、緣にしたがふものは、すなはちみな解脱をかふむるといふに至るまでは、その五乘八萬の教益をあかすなり、これ聖道門のこゝろなり、つぎに

しかるに衆生障重くして悟をとるものあさらめがたしといふよりは、觀經起化の宗致を辨ぜ、これは釋尊定散の要門を開説して、息慮凝心、廢惡修善の道理をしめし、彌陀別意の弘願を顯彰して善惡凡夫皆乘大願の利益をほどこせり、これ淨土門のこゝろあり、かくのごとく二門を分別してこゝろうるに、淨體無由顯照の義をもてみれば、隨緣者卽皆蒙解脫の利益は隨分の益あり、眞實に淨體を顯照する證悟の位にはあらぜときこえたりこれ世末代にをよび人下根あるがゆへあり。

（歩船鈔）

●たとひかれはふかく、これはあさく、かれはいみじく、これはいやしくとも、わが身の分にしたがひて、流轉の苦をまぬがれて、不退の位をゑあばさてこそあらめ、ふかきあさきを論じてあにゝかはせん、いはんやかのいみじきひとぐのめでたき教法をさとりて佛になるといふも、このあさましき身の念佛して往生すといふも、しばらくいりかゞはまちくあれども、おちつけどころは一つあり、善導ののたまはく八萬四千の門、門々不同

聖道門は難行道にして浄土門は易行道なり

にして、また別あるにあらず、別々の門はかへりておなじといへり、しかればすなはちみなこれ同じく、釋迦一佛の說あればいづれをまされり、いづれをおとれりといふべからず。（後世物語）

難行道とは即ち是れ聖道門なり、易行道とは即是れ浄土門なり、難行、易行、聖道、浄土其言異なると雖も其意おなじ。（選擇集）

龍樹大士世にいでゝ、難行易行のみちをしへ、流轉輪廻のわれらをは、弘誓のふねにのせたまふ。（和讃）

菩薩阿毘跋致を求むるに二種の道あり、一には難行道、二には易行道なり、難行道は五濁の世無佛の時に於て阿毘跋致を求むるを難とおす、譬へば陸路の歩行は則苦しきがごとし、易行道とは謂くたゞ信佛の因縁をもて浄土に生ぜんと願ずれば佛の願力に乘じて便ち彼の清浄の土に往生することを得しむ、佛力住持して即ち大乘正定の聚に入る、正定は即ち是れ阿毘跋致なり、譬へば水路の乘船は則ち樂しきが如し。（往生論註）

このことはりにまよへらん人は、いかにもく學

問して本願のむねをしるべきあり、經釋をよみ學すといへども、聖教の本意をこゝろゑざる條、もとも不便のことあり、一文不通にして經釋のゆくちもしらざらんひとの、とゑへやすからんための名號におはしますゆへに、易行といふ、學問をむねとするは聖道門あり、難行とあづく、わやまて學問して名聞利養のおもひに住するひと、順次の往生いかゞわらんぞらんといふ證文もさふらうぞかし。（歎異鈔）

●すべて一代を簡別するに二種あり、いはく聖道淨土の二門あり、聖道の方をば難行道といひ、淨土の方をば易行道とあづく、聖道の諸門は智慧もめでたき人のさとりをきはめて出離せしめ、淨土の一門は愚鈍につたなきものゝ往生を遂ぐるにつきて、難易をわかてるにてしりぬべし、しかるに樂邦文類には、淨土難易にわらぎ、難易人にあり、難とは疑情、悶尺萬里、易とは信心、萬里悶尺といへる歟。（慕歸繪詞）

●行について分つときは難行易行といふ、凡聖について論するときは聖道淨土とあづくるあり、聖道

聖道門は自力にして淨土門は他力なり

門といふは、聖者にをきては修行しがたかるべきにあらぎ、凡夫にのぞむればみな難行あり、聖者の行ぎる道あるがゆへに、聖道といへば凡夫の身には難行あるべきこと、その義あきらかあり、易行道といひ、淨土門といふは、此土の修道をさしをきて往生淨土を願ぎるあり、聖道の難行あるに對して易行道といひ、現身修入の道に翻じて往生淨土門といふ、これみな凡夫にかふらしむることばあり。

（歩船鈔）

●此に在て心を起し行を立つる者は、則ち是れ聖道自力と名く、たとひ一生惡業を造れぎも、三信相應すれば是れ一心あり、一心は淳心あれば如實と名く、若し生ぜんば是の處はり無けん、必ぎ安樂國に往生することを得れば、生死則ち是れ大涅槃あり、則ち易行道、他力と名つく。（二門偈）

●諸の大乘教に辨ぎる所の一切の行法、皆自力、他力、自攝、他攝あり、何者か自力、譬へば人あり、生死を畏怖て發心出家して、定を修し通を發して四天下に遊ぶが如し、名けて自力とあす、何者か他力、もし劣夫ありて、已身の力を以て驢に

またがるに上らぎ、もし輪王に従へばすあはち空に乗じて四天下に遊ぶが如し、即ち輪王威力の故に他力と名く、衆生も亦爾あり、此に在りて心を起し行を立て浄土に生れんと願ぜ、此は是れ自力あり、命終の時に臨みて、阿弥陀如来光臺迎接して遂に往生を得、即ち他力とあす、（安樂集）

◉眞宗の門に於てはいくたびも廢立をさきとせり、廢といふは捨ありと釋す、聖道門の此土の入證得果、已身の弥陀、唯心の浄土等の凡夫不堪の自力の修道をすてよとあり、立といふはすあはち弥陀

他力の信をもて凡夫の信とし、弥陀他力の行をもて凡夫の行とし、弥陀他力の作業をもて凡夫報土に往生する正事として、この穢界をすてゝかの浄刹に往生せよと、しつらひたまふをもて眞宗とす

しかるに風聞の邪義のごとくんば、廢立の一途をすてゝ此土他土を分けぜ、浄穢を分別せぜ、此土をもて浄土と稱し、凡形の知識をもてかたじけあく三十二相の佛體とさだむらんこと、浄土の一門に於てはかゝる所談あるべしともおぼへぜ、下根愚鈍の短慮おほよす迷惑するところあり、已身の

聖道門の法は時機に相應せず淨土の法門は時機に相應す

彌陀、唯心の淨土と談ぜる聖道の宗義に差別せるところいづくぞや、もとも荒涼といひつべし。

（改邪鈔）

◎聖道の諸教は在世正法の爲めにして、像末法滅の時機に非ず、已に時を失し機にそむける故なり、淨土眞宗は在世正法、像末、法滅、濁惡の群萌齊しく悲引したまふ。

（教行證文類）

◎大集經に云く、我が末法の時の中の億々の衆生行を起し道を修せんに、未だ一人も得る者あらじと、當今は末法にして是五濁惡世なり、唯淨土の一門のみ有て通入すべき路なりと。

（安樂集）

◎釋尊の滅後におひて正像末の三時あり、そのうち正法千年のあひだは教行證の三ともに具足しき、像法千年のあひだは教行ありといへども證果の人なし、末法萬年のあひだは教のみありて行證はなし、いまの世はすなはち末法のはじめなれば、たゞ諸宗の教門はあれども、まことに行をたて證をうるひとはまれなるべし、されば智慧をみがきて煩惱を斷ぜんこともかなひがたく、心をしづめて禪定を修せんこともありがたし、こゝに念佛往

生の一門は末代相應の要法、決定往生の正因なり。

●伏して以みれば釋迦選擇の教風、惑染覆障の霞雲をはらふといへども、正像春夏の天朦朧として光あきらかならず、然に末法の秋の空寂靜にして、淨土圓滿の月朗かなり、こゝにしんぬ、西方の教潤高峰より出て、遐溪の垢濁をすゝぎ、彌陀の法水遼季の減刧に流れて、あまねく六趣四生の乾地をうるはす。

●しかればまれにもうけがたきは人身、あひがたきは佛法なり、たまく佛法にあふことをえたりといふとも、自力修行の門は末代なれば、いまのときは出離生死のみちはかなひがたきあひだ、彌陀如來の本願にあひたてまつらぢばいたづらことなり。

それ末代の惡人たらん輩は、みなく心を一にして阿彌陀佛をふかくたのみたてまつるべし、そのほかにはいづれの法を信ぜといふとも、後生のたすかるといふ事ゆめくあるべからぢ。（御文）

●末法五濁の衆生は、聖道の修行せしむとも、ひと

（持名鈔）

（遺德記）

浄土門中他力弘願門に對して自力方便の二門あり

りも證をゑじとこそ、教主世尊はときたまへ。正像末の三時には、彌陀の本願ひろまれり、像季末法のこの世には、諸善龍宮にいりたまふ。像末五濁の世となりて、釋迦の遺教かくれしむ、彌陀の悲願ひろまりて、念佛往生さかりあり。像法のときの智人も、自力の諸教さしをきて、時機相應の法あれば、念佛門にぞいりたまふ。(和讃)

(附) 方便の二門

●然れば娑婆の化主は其請に因るが故に、卽ち廣く淨土の要門を開く、安樂の能人は別意の弘願を顯

(其一)方便要門

彰す、その要門とは卽ち此觀經の定散二門是あり、定とは卽ち慮を息め心を凝らす、散とは卽ち惡を廢め以て善を修す、斯の二行を廻して往生せんと願ひ求むるあり、弘願といふは大經に說くが如し。(玄義分)

●此に依て方便の願を按ずるに、假あり、眞あり、亦行あり、願とは卽ち是れ臨終現前の願あり、行とは卽ち是れ修諸功德の善あり、信とは卽ち是れ至心發願欲生の心あり、此願の行信によりて淨土の要門方便權假を顯開す。(敎行證文類)

●諸佛如來異れる方便ありといふは、則ち是れ定散諸善方便の教たることを顯はすあり。（教行證文類）

●おほよそ八萬四千の法門はみあこれ淨土の方便の善あり、これを要門といふ、これを假門とあづけたり、この要門假門といふは、すあはち無量壽佛觀經一部にときたまへる定善、散善これあり、定善は十三願あり、散善は三福九品の諸善あり、これみあ淨土方便の要門あり、假門ともいふ、この要門假門よりもろ〳〵の衆生をすゝめこしらへて、本願一乘圓融無碍、眞實功德大寶海にをしへすゝめひれたまふがゆへに、よろづの自力の善業をば方便の門とまうすあり。（一念多念證文）

●至心發願欲生と十方衆生を方便し、衆善の假門ひらきてぞ、現其人前と願じける。

念佛成佛これ眞宗、萬行諸善これ假門、權實眞假をわかぎして、自然の淨土をゑぞしらぬ。

釋迦は要門ひらきつゝ、定散諸機をこしらへて、正雜二行方便し、ひとへに專修をすゝめしむ。（和讃）

●方便眞門の誓願に就て、行あり信あり、亦眞實わ

（其二）方便眞門

り方便あり、願とは卽ち植諸德本の願是れなり、行とは此に二種あり、一には善本、二には德本なり、信とは卽ち至心回向欲生の心是なり（二十の願あり）機に就て定あり散あり、往生とは此れ難思往生是なり、佛とは卽ち化身、土とは卽ち疑城胎宮是なり、觀經に準知するに此小經にも亦顯彰隱密の義あるべし、顯といふは、經家は一切諸行の少善を嫌ひ貶め、善本德本の眞門を開示し、自利の一心を勵まして難思往生を勸む、此は是れ此の經に顯の義を示すなり、此れ乃ち眞門の中の

方便なり、彰と言は眞實難信の法を彰はす。

（教行證文類）

●彌陀經往生といふは、植諸德本の誓願によりて不果遂者の眞門にいり、善本德本の名號をゑらびて萬善諸行の少善をさしおく、しかりといへども定散自力の行人は不可思議の佛智を疑惑して信受せず、如來の尊號をおのれが善根として、みづから淨土に廻向して果遂の誓をたのむ、如來の尊號を稱念するゆへに胎宮にとゞまる、德號によるがゆへに難思往生とまうすなり、不可思議の誓願疑惑

するつみによりて難思議往生とはまふさゞとしるべし。

（三經往生文類）

●心廻向欲生と、十方衆生を方便し、名號の眞門ひらきてゞ、不果遂者と願じける。

（和讃）

第貳　宗義要旨編

第一章　總說

●あらゆる衆生その名號を聞きて、信心歡喜せんこと乃至一念せん、至心に廻向したまへり、かの國に生せんと願ぜれば、すなはち往生を得、不退轉に住す、たゞ五逆と誹謗正法とを除く。

（無量壽經）

●それ一如に範衛してもて化を流すは法王、四海に光澤して、もて風に乘ずるは仁王なり、然れば則

ち仁王法王たがひに顯はれて物を開し、眞諦俗諦たがひに因りて教を弘む、このゆへに玄籍字内にみち、嘉猷天下にわふる。

（教行證文類）

もろ〳〵の雜行雜修自力の心をふりすて〻、一心に阿彌陀如來、我等が今度の一大事の後生御たすけさふらへとたのみまうしてさふらふ、たのむ一念のとき往定一定御たすけ治定とぞんじ、このうへの稱名は御恩報謝とぞんじよろこびまうし候、この御ことはり聽聞まうしわけさふらふことは御開山聖人御出世の御恩、次第相承の善知識のあ

さからざる御勸化の御恩とありがたく存じ候、このうへはさだめおかせらるゝ御おきて、一期をかぎりまもりまうすべく候。

（改悔文）

御一流においては、在家出家、外儀のすがたはことなりといへども、内心に彌陀の本願信受の義はかはらず、みな如來より廻向しますます大慈大悲の御方便なれば、憶念の心つねにして佛恩報ぜる思ひありとなん、この旨を心中にふかくおさめて外相には仁義禮智信を守り、世間通途の義に順じて諸宗諸法を謗せず、諸神諸佛をかろしめず、眞

俗ともにおのれを忘れ、他をめくみ、ふかく善知識の御教のごとく、佛法を信する心あれば、稱名もをこたらず、是れ佛祖報恩のためなり。

（反古裏）

●佛法王法は一雙の法なり、とりの二のつばさのごとし、くるまの二の輪のごとし、ひとつもかけては不可なり、かるがゆへに佛法をもて王法をまもり、王法をもて佛法をあがむ、これによりて上代といひ、當時といひ、國土をおさめまします明主みな佛法紹隆の御願をもはらにせられ、聖道といひ、淨土といひ、佛教を學する諸僧かたじけなく天下安穩の祈請をいたしたてまつる、一向專念のともがら、おんぞこのことはりを忘れんや、おかんつくに、曠劫流轉のあひだ、多少沈沒のほど、善根薄少にして、いまだ火宅をいでざるところにたまたま南浮の人身をうけて、さいはひに西方の佛教にあへり、このゆへに生々にうけし六道の生よりは、このたびの人身はもともよろこばしく、世々にかうふりし、國王の恩よりは、このところの皇恩はことにおもし、世間につけ、出世につけ

恩をあふぎ德をあふぐ、いかでか王法を忽緒したてまつるべきや。

（破邪顯正鈔）

●王法は額にあてよ、佛法は內心に深く蓄へよとの仰に候、仁義といふ事も端正あるべきことなるよしに候。

（御一代記聞書）

●夫れ當流門徒中にをいて、すでに安心決定せしめたらん人の身のうへにも、また未決定の人の安心をとらんとおもはん人も心得べき次第は、まづはかには王法を本とし、諸神諸菩薩をかろしめゝ、また諸宗諸法を謗せゝ、國ところにあらは、守護地頭にむきては、疏略おくかぎりある年貢所當をつぶさに沙汰をいたし、そのほか仁義をもて本とし、また後生のためには、內心に阿彌陀如來を一心一向にたのみたてまつりて、自餘の雜善にこゝろをば止めゝして、一念も疑心おく信じまいらせば、かならゝ眞實の極樂淨土に往生すべし。（御文）

●或時の仰に、信心決定し念佛申させたまふしるしには、昔のあしかりし心をも思ひあはし、世間の道にもそむかゝ、師をうやまひ、主君に忠義をつくし、親に孝をおし、兄弟にしたしく、妻子にむ

つまじく、他人の交はりには仁義を守り、伴同行にはねんごろにあらんこそ後世を願ひ往生浄土の身とありたるしるしとも申すべき、よく〳〵御心得候べし。往生の信心は他力にまかせ、私のはからひはゆめ〳〵あるまじく、何事も如來の御はからひぞと深く本願をたもち、少しも我心をそへぬこそ他力信心の人とは申すあり、往生の一大事と申すことは、たゞ信心一つにかぎりきはまり候、信心だにまことあれば稱名の行は具し候べし、信心決定あさ人はたとひ念佛せさせたまふとも、

報土の往生はかあひがたく候。

（教名集）

第二章　佛陀　彌陀　彌陀の意義

第一節

第一項

何をか佛陀といふや

佛といふは乃ちこれ西國の正音あり、此の土には覺と名づく、自覺、覺他、覺行窮滿これを名づけて佛とあす、自覺といふは凡夫に簡異ぶ、此れ聲聞は狹劣にして、唯能く自利のみありて闕けて利他の大悲あきに由るが故に、覺他といふは二乘に簡異ぶ、此れ菩薩は智あるが故に能く自利し、悲

何をか阿彌陀といふや

あるが故に能く利他す、常に能く悲智雙行して有無に着せざるに由てあり、覺行窮滿と言は菩薩に簡異ぶ、此れ如來は智行已でに窮まり、時刼已でに滿ちて三位を出過せるに由るが故に、名づけて佛とあす。

（玄義分）

●彌陀如來は、如より來生して報、應、化種々の身を示現したまふ。

（教行證文類）

●彼の佛の光明無量にして、十方の國を照すに障碍する所あし、是の故に號して阿彌陀とあす。

（阿彌陀經）

●盡十方無碍光如來とまふすは、すあはち阿彌陀如來あり、この如來は光明あり、盡十方といふは、盡はつくすといふ、ことごくくといふ、十方世界をつくしてことごくくみちたまへるあり、無碍といふはさはることあしとあり、衆生の煩惱惡業にさへられざるあり、光如來とまふすは阿彌陀佛あり、この如來はすあはち不可思議光佛とまふす、この如來は智惠の相あり、十方微塵刹土にみちたまへりとしるべしとあり。

（尊號眞像銘文）

●又舍利弗、彼の佛の壽命、及び其人民無量無邊阿

僧祇劫あり、故に阿彌陀と名けたてまつる。

（阿彌陀經）

●阿とは是れ無、彌とは是れ量、陀とは是れ壽、佛とは是れ覺、今無量壽と云ふは是れ法、覺とは是れ人、人法並び彰はす、故に阿彌陀佛と名く。

（玄義分）

●阿彌陀は天竺のことばあり、こゝには翻じて或は無量光といひ、あるひは無量壽と稱す、これすなはち光明の無量あるは、横に十方の利益のほとりあることをあらはし、壽命の無量あるは竪に三

世の化導のかぎりあることをしめすあり、しかれば南無阿彌陀佛といふは、光明無量の德に歸して攝取不捨の益にあづかり、壽命無量の德に歸して永無生滅の身をえんとねがふこゝろありと知るべし。

（顯名鈔）

●我彌陀は名を以て物を攝す。

（教行證文類）

●如來の尊號は不可稱不可說不可思議にましますゆへに一切衆生をして、無上大涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲のちかひの御名あり、この佛の御名はよろづの如來の名號にすぐれたまへり、これす

おはち誓願おるがゆへあり。（唯信鈔文意）

●佛心とは大慈悲是あり、無縁の慈を以て諸〳〵の衆生を攝したまふ。（觀無量壽經）

●十方群生海は斯の行信に歸命すれば、攝取して捨てたまはぎ、故に阿彌陀佛と名づけたてまつる。（教行證文類）

●唯だ念佛の衆生を觀そなはし、攝取して捨てたまはぎ、故に阿彌陀と名づけたてまつる。（往生禮讃）

●十方微塵世界の念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば阿彌陀とおづけたてまつる。（和讃）

●第十八の本願成就のゆへに阿彌陀如來とおらせたまひて、不可思議の利益きはまりましまさぬ御かたちを、天親菩薩は盡十方無碍光如來とあらはしたまへり。（末燈鈔）

●さて一期のいのちつきぬれば、かの極樂淨土へおくりたまふを、すなはち阿彌陀佛とはまうしたてまつるなり。（御文）

第二項　誓願と慈悲須要の誓願

（一）

第十二願（光明無量）

●設ひ我れ佛を得むに、光明によく限量ありて、下百千億那由他の諸佛の國を照さゞるに至らば、正覺を取らじ。

（無量壽經）

第十三願（壽命無量）

●設ひ我れ佛を得むに、壽命に能く限量ありて、下百千億那由他劫に至らば、正覺を取らじ。

（無量壽經）

第十七願（諸佛稱揚）

●設ひ我れ佛を得むに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我が名を稱ぜんば、正覺を取らじ。

（無量壽經）

第十八願（念佛往生）

●設ひ我れ佛を得むに、十方衆生、心を至し信樂して、我國に生れんと欲ふて、乃至十念せん、若し生れざれば正覺を取らじ、唯だ五逆と正法を誹謗せんをば除く。

（無量壽經）

第十八願は四十八願中の王なり

●凡そ四十八願皆本願ありと雖も、殊に念佛を以て往生の規とあす、故に善導釋して曰く、弘誓多門にして四十八あれども、偏へに念佛を標して最も親しとあす、人能く佛を念ぜれば佛還て念じたまふ、專心に佛を想へば佛人を知りたまふ、故に知りぬ、四十八願の中に既に念佛往生の願を以て、本願の中の王とあす。

（選擇集）

第十一願（必至滅度）

●設ひ我れ佛を得むに、國の中の人天、定聚に住し必ず滅度に至らずんば、正覺を取らじ。

（無量壽經）

第二十二願（必至補處）

●設ひ我れ佛を得むに、他方の佛土の諸の菩薩衆我國に來生して必ず一生補處に至らん、其の本願の、自在の所化衆生のための故に、弘誓の鎧を被て德本を積累し、一切を度脫し、諸佛の國に遊んで菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立てしめんをば除かん、常倫に超出し、諸地の行現前し

普賢の德を修習せん、若し爾らずんば正覺を取らじ。

（無量壽經）

三誓

●我れ超世の願を建つ、必ず無上道に至らん、斯の願滿足せずば誓ふて正覺を成らじ、我れ無量劫に於て大施主となりて、普く諸の貧窮を濟はずんば誓ふて正覺を成らじ、我れ佛道を成るに至りて名聲十方に超へん、究竟して聞ゆる所あくんば誓ふて正覺を成らじ。

（無量壽經）

彌陀は一切衆生を救ひたまふ

（三）萬機の救濟

●たとひ我れ佛を得むに、十方衆生、心を至し信樂

して我國に生れんと欲ふて、乃至十念せん、若し生れざれば正覺を取らじ、唯だ五逆と正法を誹謗せんをば除く。

（無量壽經）

●唯除はたゞのぞくといふことばあり、五逆のつみひとをさらひ、謗法のおもきとがをしらせんとあり、このふたつのつみのおもきことをしめして、十方の一切の衆生、みあもれざ往生すべしとしらせんとあり。

（尊號眞像銘文）

●佛心とは大慈悲是なり、無緣の慈悲を以て諸の衆生を攝したまふ。

（觀無量壽經）

●眞實の信の願とは至心信樂の願あり、斯れすなはち選擇本願の行信あり、其機は則ち一切善惡大小凡愚あり。

（教行證文類）

●凡そ大信海を按ざれば、貴賤緇素を簡ばざ、男女老少を謂はざ、造罪の多少を問はざ、修行の久近を論せざ、行に非ざ、善にあらざ、頓に非ざ、漸にあらざ、定に非ざ、散にあらざ、正觀に非らざ、邪觀にあらざ、有念に非らざ、無念にあらざ、尋常に非らざ、臨終にあらざ、多念に非ざ、一念にあらざ、唯是れ不可思議不可說不可稱の信樂あ

り、喩へば阿伽陀藥の能く一切の毒を滅するが如し、如來誓願の藥能く智愚の毒を滅す。

（教行證文類）

●彼の佛の因中に弘誓を立てたまへり、名を聞て我を念せば總べて迎へ來しめむ、貧窮と富貴とを簡ばず、下智と高才とをえらばず、多聞と淨戒を持てるとを簡ばず、破戒と罪根の深きとをえらばず但た廻心して多く念佛せしむれば、能く瓦礫をして變じて金と成すがごとくあらしむ。

（教行證文類）

●第八に彌陀の淨國は位上下を該ね凡聖通じて往くことを明すとは、今此の無量壽國は是れ其報の淨土なり、佛願に由るが故に乃ち上下を該通せり、凡夫の善をして並に往生を得しむることを致す、上を該ぬるに由るが故に天親龍樹及び上地の菩薩皆生ずるなり。

（安樂集）

●問て曰く、彼の佛及び土既に報と云へば、報法高妙にして小聖階し難し、垢障の凡夫云何が入ることを得んや、答て曰く、若し衆生の垢障を論せば實に忻願し難し、正しく佛願に托するに由て、以

て強縁となして五乘をして齊しく入らしむることを致す。

（教行證文類）

●定散と逆惡とを矜哀む。

（正信念佛偈）

●すべて善き人、惡しき人、たふとき人、ひやしき人を、無碍光佛の御ちかひにはゑらばず、これをみちびきたまふをさきとし、むねとするなり。

（唯信鈔文意）

●衆生にかはりて願行を成すること、常沒の衆生をさきとして善人に及ぶまで、一切衆生のうへにも及ばざるところあらば、大悲の願滿足すべからず。

（決定鈔）

五逆の人救濟せらる

●至心信樂欲生と、十方諸有をすゝめてぞ、不思議の誓願あらはして、眞實報土の因とする。

（和讃）

無碍光佛のひかりには、清淨歡喜智慧光、その德不可思議にして十方諸有を利益せり。

●問て曰く、四十八願の中の如きは、唯だ五逆と誹謗正法とを除いて往生を得しめぞ、今この觀經の下品下生の中に、謗法を簡ひて五逆を攝するは何の意かある、答て曰く、此の義仰で抑止門の中に就て解す、四十八願の中の如き謗法と五逆とを

除けるは、然も此二業其障り極めて重し、衆生若し造れば直ちに阿鼻に入て、劫を歴て周章して出づべきに由なし、但し如來それこの二過を造らんことを恐れて、方便して止めて往生を得ぎとのたまふ、亦是れ攝せざるにあらぎ、又下品下生の中に五逆を取て謗法を除けるは、その五逆は已に造れり、捨て流轉せしむべからぎ、還て大悲を起こして攝取して往生せしむ、然るに謗法の罪は未だつくらぎ、又止めて若し謗法をおこさば即ち生ることを得じとのたまふ、此れ未造業について解

正法を誹謗するものも回心懺悔すれば救済せらる

すあり、もし起らば還て攝して生るゝことを得しむ、生ぎることを得と雖も、彼こに華合して多劫をふる、此義抑止門について解し竟ぬ。（散善義）

佛の願力を以て五逆と十悪と罪滅して生を得しむ

謗法闡提回心すれば皆往く。（法事讃）

まづ逆罪等をつくること、全く諸宗のおきて佛法の本意にあらぎ、しかれども悪業の凡夫過去の業因にひかれてこれらの重罪をおかす、これ止めかたく伏しがたし、また小罪ありとも、をかすべからぎとひへば、凡夫心にまかせて罪をば止めえつべ

しときこゆ、しかれどもとより罪体の凡夫、大小を論せず三業みな罪にあらずと云ことなし、しかるに小罪をもをかすべからずといへば、あやまてもをかさば往生すべからざるなりと落居する歟、この條もとも思擇すべし、これもし抑止門のこゝろ歟、抑止は釋尊の方便なり、眞宗の落居は彌陀の本願にきはまる、しかれば小罪も大罪もつみの沙汰をしたくば、止めてこそその詮はあれ、止めえつゝくもあき凡慮をもちながら、かくのごとくいへば彌陀の本願に歸托する機いかでかあらん、

謗法罪はまた佛法を信ずるこゝろのなきよりをこるものなれば、もとよりそのうつはものにあらずもし改悔せば生るべきものなり。（口傳鈔）

（附）方便の誓願

設し我れ佛を得むに、十方の衆生菩提心を發し、諸の功德を修し、心を至し、我國に生れんと欲はん、壽終る時に臨んで、たとひ大衆と圍繞りて其の人の前に現はれずんば、正覺を取らじ。（無量壽經）

至心發願欲生と、十方衆生を方便し、衆善の

第二十（不果遂者又は植諸德本）の願

第二十の願の意義

假門ひらきてぞ、現其人前と願じける。（和讃）

㊐設し我れ佛を得むに、十方の衆生我が名號を聞きて、念を我國に係けて、諸の德本を植へて、心を至し、廻向して我國に生れむと欲はん、果遂げぞば正覺を取らじ。（無量壽經）

㊑至心廻向欲生と、十方衆生を方便し、名號の眞門ひらきてぞ、不果遂者と願じける。（和讃）

㊒みづからのはからひをさしはさみて、善惡の二につきて、往生のたすけ、さはり、二た樣におもふは、誓願の不思議をばたのまぞして、わが心に往

生の業をはげみて、まふすところの念佛をも自行にあすあり、このひとは名號の不思議をもまた信せざるあり、信せざれども邊地懈慢、疑城胎宮にも往生して、果遂の願の故につゐに報土に生ぜるは、名號不思議のちからあり、これすなはち誓願不思議のゆへあれば、たゞ一つあるべし。（歎異鈔）

㊓たとひ一世二世に利益にもるとも、如來つねに世にましますがゆへに、つゐにその濟度にあづかるべし、阿彌陀經の中に、已發願、今發願、當發願

のもの、みな往生すべしとゝけるはこのこゝろなり、第二十の果遂の願またその義あり、修行に眞假あれば往生に遲速あるべきがゆへに、あるひは二世三世にも往生する順次にも往生し、あるひは一念往生の誓願をもの、相續してたゆべからぞ、十念往生の誓願ををこし、十劫成道の方便をしめして、一心專念の行者をば、十八の願をもて攝受し、修諸功德の行人をば、十九の願にて引接し、乃至かりにも念をかの國にかくる機をば、二十の願をもて果遂せしめたまふがゆへに、發心に前後あれは往生にまた遠近あれども、つゐには六道生死、無常の壽命を攝して、みな一實眞如、本有無量壽の佛智に流入せしむべしとしるべきなり。

（顯名鈔）

●是を以て愚禿釋の鸞、論主の解義を仰いで、宗師の勸化によりて、久しく萬行諸善の假門を出でゝ永く雙樹林下の往生を離る、善本德本の眞門に回入して偏へに難思往生の心を發しき、然るに今特に方便の眞門を出でゝ選擇の願海に轉入せり、速に難思往生の心を離れて難思議往生を遂げんと欲す、果遂の誓良に由ある哉。

（教行證文類）

第三項　誓願の成就

（一）願成就の證

阿難佛に白さく、法藏菩薩已に成佛して滅度を取りたまへりとやせん、未だ成佛したまはざるとやせん、今現に在すとやせん、佛阿難に告たまはく、今已に成佛して現に兩方にまします、此を去ること十萬億の刹あり、その佛の世界を名けて安樂といふ。（無量壽經）

問て曰く一切の菩薩其願を立つと雖も、或は已に成就せるあり、亦未だ成就せざるあり、未だ審かし、法藏菩薩の四十八願已に成就せりとやせん、將た未だ成就せざるとやせん、答曰く法藏の誓願一々に成就したまへり（此下に各の願の成就の文を擧ぐ今略す）加之一々の願の終りに、若し爾ざれば正覺を取らじと云へり、而に阿彌陀佛成佛より已來今に於て十劫、成佛の誓既に以て成就し給へり、當に知るべし一々の願虛く設くべからざる故に善導の曰く、彼の佛今現在世にして成佛したまへり、當に知るべし、本誓重願虛しからざる、衆生稱念すれば必ず往生を得ることを。（選擇集）

一切の群生海は無始より已來、乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心なし、虛假諂僞にして眞實の心なし、是を以て如來一切苦惱の衆生海を悲憫みて、不可思議兆載永劫に於て菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修一念一刹那も淸淨あらざることなし、眞心あらざることなし、如來淸淨の眞心を以て圓融無碍不可思議不可稱不可說の至德を成就したまへり、如來の至心を以て、あらゆる一切煩惱惡業邪智の群生海に回施したまへり。

（敎行證文類）

須要の願成就の證文

第十二の願成就の文

末代不善の凡夫、五障三從の女人をば、彌陀にかぎりて、われひとりたすけんといふ超世の大願をおこして、われら一切衆生を平等にすくはんとちかひたまひて、無上の誓願をおこして、すでに阿彌陀佛とありましくけり。

（御文）

無量壽佛の光明顯赫にして、十方諸佛の國土を照耀たまふに、きこえずといふことなし、又佛のたまはく、無量壽佛の光明威神巍々殊妙なることをとかんに、晝夜一劫すともなほいまだつくこと能はじ。

（無量壽經）

第十三の願の成就の文

◎法身の光輪きはもなく、世の盲冥をてらすあり。（和讃）

◎無量壽佛の壽命 長久にして稱計すべからず、汝等ろ知らんや、たとひ十方世界の無量の衆生、みな人身を得て、悉く聲聞緣覺を成就せしめ、すべて共に集會りて、思をしづかにし心を一にして其智力をつくして、百千萬劫に於て悉く共に推算して、其壽命の長遠の數を計へんに、其限極を窮めつくして知ること能はじ。（無量壽經）

◎彌陀成佛のこのかたは、いまに十劫をへたまへり。

第十七の願の成就の文

◎十方恒沙の諸佛如來、みなともに無量壽佛の、威神功德不可思議なるを讃嘆したまふ。（無量壽經）

第十八の願の成就の文

◎あらゆる衆生其の名號をきゝて、信心歡喜せんこと乃至一念せん、心を至し廻向したまへり、彼國に生れんと願ずれば、即ち往生を得て不退轉に住す、唯だ五逆と誹謗正法とを除く。（無量壽經）

◎十方諸有の衆生は、阿彌陀至德の御名をきゝ、眞實信心いたりなば、おほきに所聞を慶喜せん。若不生者のちかひゆへ、信樂まことにときいたり

一念慶喜するひとは、往生かならずさだまりぬ。

（和讃）

第十一の願の成就の文

●それ衆生ありて、彼國に生ずれば、皆悉く正定の聚に住す、所以は如何、彼の佛國の中には、諸の邪定聚及び不定聚あればなり。（無量壽經）

●安樂國をねがふひと、正定聚にこそ住すなれ、邪定不定聚くにゝあし、諸佛讃嘆したまへり。（和讃）

●等覺を成り大涅槃を證することは、必至滅度の願成就したまへばなり。（正信念佛偈）

（三）成佛の時節

十劫の昔

●阿難又問ひたてまつる、其佛成道したまひてより已來、幾の時を經たまへりとせん、佛言く、成佛より已來凡そ十劫を歷たまへり。（無量壽經）

●阿彌陀佛成佛より已來今に十劫あり。（阿彌陀經）

●成佛より已來十劫を歷たまへり、壽命方に量ある ことなからん（讃阿彌陀佛偈）

●十劫に道先づ成じて、界を嚴かにして群萌を引きたまふ。（往生禮讃）

●問ふ彼佛成道してより幾くか久とせん、答諸經

には十劫といふ、大阿彌陀經には十小劫といふ、平等覺經には十八劫といふ、稱讃淨土經に十大劫といふ、邪正知り難し、但し雙觀經の環興師の疏に、平等覺經を會して曰く、十八劫と云は其の小の字に、其の中の點を闕せりと。

（往生要集）

◉彌陀成佛のこのかたは、いまに十劫をへたまへり

◉彌陀成佛のこのかたは、いまに十劫とときたれど塵點久遠劫よりも、ひさしき佛とみへたまふ。

（和讃）

◉この一如より、かたちをあらはして方便法身とまふす、その御すがたに法藏比丘とあのりたまひて不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり。

（唯信鈔文意）

◉凡そ阿彌陀如來は三世の諸佛の本師あれば久遠實成の古佛にてましませども、衆生の往生を決定せんがために、しばらく法藏比丘とあのりて、その正覺を成じたまへり。

（持名鈔）

◉彌陀如來は過去をかぞふれば、成佛のゝち劫數すでにひさし、雙卷經あらびに阿彌陀經には、と

もに十劫とゝき、大阿彌陀經には十小劫とゝけり
また法華經の說のごとくならば、三千塵點の古佛
あり。

（顯名鈔）

●經には諸〳〵の衆生をして功德成就せしめたまふ
といへり、こゝろは彌陀如來因位のむかし、もろ
〳〵の衆生をして功德成就せしめたまふとあり
それ阿彌陀如來は三世の諸佛に念せられたまふ覺
體あれば、久遠實成の古佛あれども、十劫已來の
成道をとあへたまひしは果後の方便あり。

（眞要鈔）

●こゝに阿彌陀如來と申は、三世十方の諸佛の本師
本佛あれば、久遠實成の古佛として、いまのごと
きの諸佛にすてられたる、末代不善の凡夫、五障
三從の女人をば、彌陀にかぎりてわれひとりたす
けんといふ超世の大願をゝこして、われら一切衆
生を平等にすくはんとちかひたまひて、無上の誓
願をゝこして、すでに阿彌陀佛とおりましくけ
り。

（御文）

（附）方便願の成就

●佛阿難に告げたまはく、十方世界の諸天人民、そ

れ心を至して彼國に生れんと願ぜることあらむ、凡そ三輩あり、其上輩は、家を捨て欲を棄てゝ沙門となり、菩提心を發して、一向に專ら無量壽佛を念じ、諸の功德を修して彼國に生れんと願せむ、此等の衆生壽終らんときに臨みて、無量壽佛諸の大衆とゝもに其人の前に現せむ、卽ち彼の佛に隨ひて其國に往生せん、すなはち七寶華の中より自然に化生し不退轉に住せん、智慧勇猛にして神通自在ならん、是の故に阿難、其れ衆生あり、今世において無量壽佛を見たてまつらんと

おもはゞ、無上菩提の心を發し、功德を修行して彼國に生れんと願ぜべし、佛阿難に語りたまはく其中輩といふは、十方世界の諸天人民、それ心を至して彼國に生れんと願ぜることあらむ、行じて沙門となり大に功德を修することは能はずと雖も、當に無上菩提の心を發し、一向に專ら無量壽佛を念じ、多少に善を修し、齋戒を奉持し、塔像を起立し、沙門に飯食せしめ、繒をかけ燈をともし、華を散じ香をたきて、此を以て廻向して彼國に生れんと願せん、その人終りに臨んで、無量壽佛其

身を化現せん、光明相好つぶさに眞の佛の如く諸の大衆と其人の前に現せん、卽ち化佛に隨ひて其國に往生し不退轉に住せん、功德智慧次で上輩の者の如くならん、佛阿難に告たまはく、其下輩といふは、十方世界の諸天人民、それ心を至して彼國に生れんとおもはんことあらん、たとひ諸の功德をつくることあたはざれども、當に無上菩提の心を發して、一向に意を專にして乃至十念無量壽佛を念じて、其國に生れんと願ぜ、もし深法を聞きて歡喜信樂せん、疑惑を生ぜず、乃至一

念彼佛を念じて、至誠心をもて其國に生れんと願ぜん、此人終りに臨んで夢の如く彼佛を見たてまつりて亦往生を得、功德智慧次で中輩のもの、如くならん。

其胎生の者、處ところの宮殿或は百由旬或は五百由旬あり、各その中にして諸の快樂をうくること忉利天上のごとし、亦みな自然あり、その時に慈氏菩薩佛にまふしてまふさく、世尊何の因何の緣ありてか、かのくにの人民胎生あると、佛慈氏につげたまはく、もし衆生ありて、疑惑の

心をもて、もろ〳〵の功德を修して、かの國に生せんと願せん、佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を了らざして、此諸智に於て疑惑して信せざ、然かも猶ほ罪福を信じ、善本を修習して、其國に生せんと願せん、此諸の衆生、彼宮殿に生れて壽五百歳、つねに佛を見たてまつらざ、經法を聞かす、菩薩聲聞聖衆を見す、是故に彼國土に於て之を胎生といふ、もし衆生ありて、明に佛智乃至勝智を信して、諸の功德をあして信心廻向せん、此諸の衆生七寶華

の中に於て自然に化生せん、跏趺して坐せん、須臾のあいだに身相光明智慧功德、諸〳〵の菩薩のごとく具足し成就せん、彌勒當に知るべし、彼化生のものは智慧勝れたるが故に、その胎生のものは皆智慧あし、五百歳の中にして、常に佛を見たてまつらざ、經法を聞かす、菩薩諸〳〵の聲聞衆を見ざ、佛を供養せんに由あし、菩薩の法式を知らざ、功德を修習することを得ざ、當に知るべし此人宿世の時に智慧あることあくして、疑惑せしが致すところあり、乃至、もし此衆生、其本の罪

を識りて深く自ら悔責て、彼處を離れんと求めば即ち意の如くなることを得て、無量壽佛のみもとに往詣て恭敬供養せん、亦あまねく無量無數の諸餘の佛のみもとに至ることを得て、諸の功德を修せん、彌勒まさに知るべし、それ菩薩ありて疑惑を生ずるものは大利を失すとす。（無量壽經）

法身の種類

第四項

（一）

佛身
法身

●諸佛菩薩に二種の法身あり、一には法性法身、二には方便法身。（往生論註）

二種法身の意義

●佛について二種の法身まします、一には法性法身とまふす、二には方便法身とまふす。（唯信鈔文意）

●法性法身とまうすは、色もなし形もましまさず、然れば心も及ばず言もたへたり、この一如より形をあらはして方便法身とまうす、その御すがたに法藏比丘と名のりたまひて、不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり、この誓願の中に光明無量の本願、壽命無量の弘誓を、本としてあらはれたまへる御形を、世親菩薩は盡十方無碍光如來とあづけたてまつりたまへり、この如

來すあはち誓願の業因にむくひたまひて報身如來とまうすあり、すあはち阿彌陀如來と申すあり、報といふは、たねにむくひたる故あり、この報身より應化等の無量無數の身をあらはして、微塵世界に無碍の智慧光をはあたしめたまふゆへに、盡十方無碍光佛とまうす。

（唯信鈔文意）

◎眞實功德とまうすは名號あり、一實眞如の妙理圓滿せるが故に、大寶海にたとへたまふあり、一實眞如とまふすは無上大涅槃あり、涅槃すあはち法性あり、法性すあはち如來あり、寶海とまうすはよろづの衆生をきらはす、さはりなくへたてすみちひきたまふを、大海の水のへたてなきにたとへたまへるあり、この一如寶海よりかたちをあらはして、法藏菩薩とあのりたまひて、無碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿彌陀佛とありたまふかゆへに報身如來とまうすあり。

（一念多念證文）

◎まづ佛に大小の分量をさだめんことあるべからざさふらう、かの安養淨土の教主の御身量をとかれてさふらうも、それは方便報身のかたちあり、法

彌陀は報身にして化身にあらず

性のさとりをひらひて、長短方圓のかたちにもあらず、青黄赤白黑のいろをもはなれなば、おにをもてか大小をさだむへきや。（歎異鈔）

●問て曰く、彌陀の淨國は、はた是れ報おりや是れ化おりとやせん、答曰くこれ報にして化にあらず如何んが知ることを得る、大乘同性經に説くがごとし、西方の安樂阿彌陀佛は是れ報佛報土おり又無量壽經に曰く、法藏比丘世饒王佛のみもとに在して、菩薩の道を行じたまひし時、四十八願をおこして一々の願に云く、若し我佛を得むに、十

方の衆生我が名號を稱して我國に生れんと願ぜん下十念に至る迄、若し生れずば正覺を取らしと、今已に成佛したまへり、卽ち是れ酬因の身おり、又觀經の中に、上輩の三人命終の時に臨んで皆阿彌陀佛及び化佛とともに此人を來迎すと言へり、然るに報身化を兼て共に來て手を授く、故に名けて與とおす、此文證を以ての故に知りぬ是れ報おりと。（支義分）

●問阿彌陀佛、極樂淨土、是れ何身何土おりや、答ふ天台の云く應身佛同居の土おり、遠法師云く、

是れ應身應土あり、綽法師云く、是れ報佛報土あり、いにしへより等しく相傳へて皆化土化身といふ、此大失たり、大乘同性經の云ふところに依れば、淨土中の成佛者は悉く是れ報身あり、穢土中の成佛者は悉く是れ化身あり、又彼の經に云く、阿彌陀如來、蓮華開敷星王如來等の諸の如來の清淨佛刹にして、現に得道したまふ者のまさに道を得べきもの、此の如く一切は皆是れ報身の佛あり。

（往生要集）

謹んで眞佛土を按ぜれば、佛は則ち是れ不可思議光如來あり、土は亦これ無量光明土あり、然れば則ち大悲の誓願に酬報るが故に、眞の報佛土といふあり。

（教行證文類）

眞佛土といふはまことの身土あり、すなはち報佛報土あり、佛といふは不可思議光如來、土といふは無量光明土ありといへり、これすなはち第十二第十三の光明壽命の願に、こたへてうるところの身土あり、諸佛の本師はこれこの佛あり、眞實の報身はすなはちこの體あり。

（教行信證大意）

いまこの彌陀如來は報身如來あり。

（末燈鈔）

彌陀の光明は無量なり

◎たとひ念佛往生すといふとも、かの安樂淨土、報身報土にあらざるべし、凡夫の出要にたらざるべし、しかれば四十八願酬因の正覺の阿彌陀、壽命窮盡の期あるべからざる條勿論なり、したがひてすなはちかの永無生滅の彌陀報身の所居の土、また報土たる義またもて勿論なり。（願々鈔）

（三）光明

◎無量壽佛の光明顯赫にして、十方諸佛の國土を照耀したまふに、聞こへざることなし。（觀無量壽經）

彌陀の光明は諸佛の光明に超過す

◎佛のたまはく、我れ無量壽佛の光明、威神巍々殊妙なるを說かんに、晝夜一劫すとも尙ほ未だ盡すこと能はじ。（無量壽經）

◎無量壽佛の威神光明、最も尊く第一にして、諸佛の光明及ぶこと能はざるところなり。（無量壽經）

◎阿彌陀佛の光明の殊好なることは、日月の明よりも勝れたること百千億萬倍なり、諸佛の光明中の極明なり、光明中の極光なり、諸佛中の王なり、光明中の極尊なり。（敎行證文類）

彌陀の光明には十二の德あり

◎無量壽佛を、無量光佛、無邊光佛、無碍光佛、無對光佛、燄王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號す。（無量壽經）

◎智慧の光明はかりなし、有量の諸相ことごとく、光曉蒙らぬものはなし、眞實明に歸命せよ、（無量光）解脫の光輪きはもなし、光觸かふるものはみな、有無をはなるとのべたまふ、平等覺に歸命せよ（無邊光）光雲無碍如虛空、一切の有碍にさはりなし、光澤かふらぬものぞなき、難思議を歸

命せよ、（無碍光）清淨光明あらびなし、遇斯光のゆへなれば、一切の業繫ものぞこりぬ、畢竟依を歸命せよ（無對光）佛光照耀最第一、光炎王佛とあづけたり、三塗の黑闇ひらくなり、大應供を歸命せよ（燄王光）道光明朗超絕せり、清淨光佛とまうすなり、ひとたび光照かふるもの、業垢をのぞき解脫をう（清淨光）慈光はるかにかふらしめ、ひかりのいたるところには、法喜をうとぞのべたまふ、大安慰を歸命せよ、（歡喜光）無明の闇を破するゆへ、智慧光佛とあづけたり、一切諸

佛三乘衆、ともに嘆譽したまへり（智慧光）光明てらしてたへざれば、不斷光佛とあづけたり、聞光力のゆへあれば、心不斷にて往生す（不斷光）佛光測量あさゆへに、難思光佛とあづけたり、諸佛は往生嘆じつゝ、彌陀の功德を稱せしむ（難思光）神光の離相をとかざれば、無稱光佛とあづけたり、因光成佛のひかりをば、諸佛の嘆ずるところあり、（無稱光）光明月日に超過して、超日月光とあづけたり、釋迦嘆じてあをつきぞ、無等々を歸命せよ（超日月光）

（和讃）

第一に無碍光佛といふは利益の長遠あることを顯はす、過現未來にわたりてその限量あし、かずとしてさらにひとしきかずあきかゆへあり、第二に無邊光佛といふは照用の廣大ある德をあらはす、十方世界をつくしてさらに邊際あし、緣としてらさぞといふことあきがゆへあり、第三に無碍光佛といふは神光の障碍あき相をあらはす、八法としてよくさふることあきがゆへあり、碍にをいて內外の二障あり、外障といふは山河大地、雲霧烟霞等あり、內障といふは貪瞋痴慢等なり、光雲無

碍如虚空の徳あれば、よろづの外障にさへられぜ諸邪業繫無能碍者のちからあれば、もろ〳〵の内障にさへられぜ、かるがゆへに天親菩薩は盡十方無碍光如來と讃じたまへり、第四に無對光佛といふはひかりとしてこれに相對すべきものなし、もろ〳〵の菩薩のをよぶところにわらざるがゆへなり、第五に炎王光佛といふはまたは光炎王佛と號す、光明自在にして無上なるがゆへなり、大經に猶ほ火王の如し、一切煩惱の薪を燒き滅すが故に

とゝけるは、この光の徳を嘆ぜるなり、火をもて

たきゞをやくに、つくさずとひふことなきが如く光明の智火をもて煩惱のたきゞをやくに滅せぜとひふことなし、三塗黑闇の衆生も光照をかうふりて、解脫をうるはこのひかりの益なり、第六に清淨光佛といふは無貪の善根より生ぜ、かるがゆへにこのひかりをもて衆生の貪欲を治するなり第七に歡喜光佛といふは無瞋の善根より生ぜ、かるがゆへにこの光をもて衆生の瞋恚を滅するなり第八に智慧光佛といふは無癡の善根より生ぜ、かるがゆへにこの光をもて衆生の無明の闇を破する

なり、第九に不斷光佛といふは一切のときに時としてゝらさすといふことなし、三世常恒にして照益をなすがゆへなり、第十に難思光佛といふは佛をのぞきてより外はこの光明の德をはかるべからざるがゆへなり、第十一に無稱光佛といふは、神光、相をはなれてなづくべきところなし、はるかに言語の境界にこえたるがゆへなり、こゝろをもてはかるべからざれば難思光佛といひ、ことばをもてとくべからざれば無稱光佛と號す、第十二に超日月光佛といふは、日月はたゞ四天下を

てらしてかみ上天に及ばず、下地獄に至らず、佛光はあまねく八方上下をてらして障碍するところなし、かるがゆへに超日月光佛といふなり、この十二光佛は一々の德につき其名をあげたり、別体なるにはあらず、そもくこの光明の德用のかやうに不可思議なることは、しかしながら衆生を利益せんがためなり、その利益といふは念佛の衆生を攝取してすてず、かならず淨土に生せしむるなり。

（顯名鈔）

●昔ねく無量無邊光、無碍無對光、炎王清淨歡喜

彌陀の光明には一切衆生を照したまふ德あると共に特に信心の人を攝取したまふ益あり

智慧光、不斷難思無稱光、超日月光を放ちて、塵刹を照すに一切の群生光照を蒙ふる。

（正信念佛偈）

●佛の光明は是れ智慧の相なり、此光明十方世界を照らすに障碍あることなし、能く十方衆生の無明黑闇を除く、日月珠光の但だ室穴の中の闇を破するが如きにはあらぜ。

（往生論註）

●法身の光輪きはもなく、世の盲冥をてらすなり。

（和讃）

●無碍光佛のひかりには、清淨歡喜智慧光、その德不可思議にして、十方諸有を利益せり。

（和讃）

●盡十方の無碍光は、無明のやみをてらしつゝ、一念歡喜するひとを、かならぜ滅度にいたらしむ。

（和讃）

●彌陀如來にはすでに攝取と光明といふ二のことはりをもて、衆生をば濟度したまふなり、まづ此光明に宿善の機のありてらされぬれば、つもるところの業障のつみみなきゑぬるなり、さて攝取といふはいかなる心ぞといへば、此光明の緣にあひたてまつれば、罪障ことゞく消滅するに

よりて、やがて衆生を此光明のうちにおさめをかるゝによりて攝取とはまうすなり、このゆへに阿彌陀佛には攝取と光明との二をもて肝要とせらるゝなりとぞこゝろえたり。（御文）

疑心あればかならず彌陀は攝取したまふべし、このこゝろこそすなはち他力眞實の信心をゑたるすがたとはいふべきなり。（御文）

この第十二第十三の願成就せざれば、たとひ念佛往生の本願成就して生因たるべしといふとも、念佛衆生の往生ののぞみ達しがたし、そのゆへは光明無量の願にこたへて信心歡喜乃至一念の機を攝益したまふ、その機はまた遍照の光明にはぐくまれて、信心歡喜すれば機法一体にありて、能照所照二つあるに似たれどもまた不二あるべし。（願々鈔）

眞實信心の行人は攝取不捨のゆへに正定聚に住す、正定聚に住するがゆへにかならず滅度にいたる、かるがゆへに臨終まつことなし、來迎たのむことなしといへり。（御文）

遍照の光明の中におさめとられまいらするなり

これまことに我等が往生の決定するすがたなり。（御文）

●攝取の心光は常に照護して己に能く無明の闇を破すといへども、貪愛瞋憎の雲霧常に眞實信心の天に覆へり、譬へば日光の雲霧に覆はるれども、雲霧の下明にして闇なきが如し。（正信念佛偈）

（三）壽命

彌陀の壽命は無量なり

●無量壽佛は壽命長久にして稱計すべからず。（無量壽經）

●涅槃を得て常に世に住す、壽命延長にして量るべきこと難し、劫、千劫、萬劫、恒沙劫、兆載永劫にして亦無央なり、一たび坐して移くことなく亦不動なり、後際を徹窮して身光を放つ。（法事讃）

●成佛よりこのかた十劫をへたまへり、壽命まさに量あること無けむ。（讃阿彌陀佛偈）

●問ふ未來壽いくばくぞ、答ふ小經に云く、無量無邊阿僧祇劫と、觀音授記經に曰く、阿彌陀佛の壽命無量百千億劫にして、當に終り窮まることあるべし。（往生要集）

彌陀の壽命無量なるは一切衆生を攝化したまはんが爲めなり

◎壽命無量の願成就これまた至要なり、そのゆへはたとひ念佛往生すといふとも、かの安樂淨土報身報土にあらざれば、凡夫の出要にたらざるべし、しかれば四十八願酬因の正覺の阿彌陀、壽命窮盡の期あるべからざる條勿論あり。

◎超世無上に攝取し、選擇五劫思惟して、光明壽命の誓願を大悲の本としたまへり。（和讃）

◎彌陀の壽命の無量なることは、利益三世にわたりて衆生を化度することかぎりなからんがためなり諸佛の壽命は長短ともに機にしたがひてその益あ

りといへども、壽命のいたりてみじかきは利益にもるゝ衆生おほし、彌陀如來は過去をかぞふれば成佛ののち劫數すでにひさし、法華經の說のごとくならば三千塵點の古佛なり、般舟經の說によらば三世の諸佛の本師なり、過去かくのごとし、未來また限量なし、千劫、萬劫、恒沙劫、兆載永劫にしてまた無央數劫なり、しかればたとひ一世二世に利益にもるとも、如來つねに世にましますがゆへにつねにその濟度にあづかるべし、阿彌陀經のなかに已發願、今發願、當發願のものみな往生

すべしとゝけるはこのこゝろあり、第二十の果遂の願またその義あり、もし如來の壽命に際限あらば利益にもるゝ衆生あるべきがゆへに、十方の有情をもらさぢ、三世の群類をのこさぢみな極樂淨土に生せしめ、無量壽の佛智に契當せしめんがために如來の壽命はかぎりなきものあり、おほよそ佛を無量壽とあづけて國を極樂と號するは、如來の名をきゝて無量壽常住の果をえんとねがひ、國土の名をきゝて涅槃常樂のさとりをひらかんとねがふべきことはりあるがゆへあり、そのゆへは生

あるものはみな死をおそるゝがゆへに、壽をもてたからとし、業をうくるものはことゞく苦をにくむがゆへに樂をねがふこゝろあり、一切のいきとしいけるもの、もし人をみるときおそれはしりかくれにぐることは、たゞ惡緣をさり壽命をまもらんがためあり、畜類のものしらぢ、おろかあるもの、あを身を愛しいのちをおしむことかくのごとし、いはんや人として生を愛し死をにくまざらんや、まことに七珍萬寶も死すればしたがふものなし、榮華榮耀もいのちのあるうへのことなり、人

間よりも天上の壽はながく、天上にとりて六欲天四禪四無色次第に上天のいのちのひさしきは、果報のすぐれ修因のまさりたるゆへなり、されば果報のすぐれたりといふは、いのちのながきをもてその詮とす、たれか命をねがはざらんや、つぎによろづの有情ことごとく苦をにくみ樂をねがふこゝろありといふは、大論の文をみるに、一切衆生皆樂を得んことを願ひ、苦惱をねがふことなしと判せり、これすなはち死をにくみて生を求め、貧をいとひて福を愛する、みな苦をにくむこゝろよりをこり、樂をねがふおもひよりいでたり、乃至病をゐてくすりを尋ね、飢にのぞみて食をもとめあつき天に風をまち、さむきときに火をもとむるまでも、苦をいとひ樂をねがふ心にわらぎといふことなし、しかれば衆生は死をにくみていのちを愛するがゆへに、長遠の壽命をもとめんとするに北州の千年もつくる期あれば人間の壽命もねがふべきにあらぎ、悲想の八萬劫もそのおはりなきにあらざれば、天上の壽命もゝとむるにたらぎ、まことに無常生滅の報をはなれ、常住無爲の果をえ

んとおもはゞ、無量壽の國にむまれんとおもふこゝろあるべし、また衆生は苦をにくみて樂をもとむるがゆへに、不退の快樂をえんとするに人天の樂はなをし電光のごとし、須臾くにしてすなはちすつ、かへりて三惡にいりて長時に苦をうくればこれ亦著すべきところなし、この故に淺より深にいたりて、次第に苦をひとひ樂をもとむるこゝろ至極せば、かならず極樂淨土にむまれんとおもふべし、こゝをもて三世の諸佛のおかに、無量壽の名をえ、十方の淨土のおかに極樂とおづくることは一切衆生ことごとく、この名號によりてかの淨土をねがひ、無量壽の壽命に歸入して、ひとしく極樂無爲の法樂をうくゞきゆへあり、しかれば南無阿彌陀佛ととなふることばのうちに、無量光に歸命する義もあり、無量壽に南無するこゝろもあるがゆへに、光明を念ぜるいはれあれば攝取不捨の益にあづかり、壽命を念ぜることはりあれば、如來の壽命に流入し、涅槃のさとりをひらくべき義あるなり。

（四）　佛德

（顯名鈔）

彌陀は萬德を備へたまふ

◎阿彌陀の三字をばいみじく說あらはさるゝに、阿の字には十方三世の佛、彌の字には一切の諸の菩薩、陀の字には八萬の諸の聖敎、三字の中に皆具足すともみへたり。（嘉歸繪詞）

◎如來の智慧海は深廣にして涯底なし、二乘の測るところにあらず、唯佛のみ獨り明に了りたまへり。（無量壽經）

◎三世十方の諸佛の三身、普門塵數の無量の法門、佛衆法海圓融萬德、凡そ無盡法海備へて彌陀の一身に在り。（往生要集）

◎弘誓一乘海は無量無邊最勝深妙不可說不可稱不可思議の至德を成就したまへり、何をもてのゆへに誓願不可思議なるがゆへに、悲願は喩ば大虛空の如し、諸の妙功德廣くして無邊なるが故に、猶し大車の如し、普く能く諸の凡聖を運載するが故に、猶し妙蓮華の如し、一切世間の法に染まざるが故に、善見藥王の如し、能く一切煩惱の病を破するが故に、猶し利劒の如し、能く一切憍慢の鎧を斷つが故に、勇將の幢の如し、一切諸の魔軍を伏するが故に、猶し利鋸の如し、能く一切無明

の樹を截るが故に、猶し利斧の如し、能く一切諸苦の枝を伐るが故に、善知識の如し、一切生死の縛を解くが故に、猶し導師の如し、善く凡夫出要の道を知らしむるが故に、猶し涌泉の如し、智慧の水を出して窮盡なきが故に、猶し蓮華の如し、一切諸の罪垢に染まざるが故に、猶し疾風の如し能く一切諸の障霧を散ずるが故に、猶し好密の如し、一切功德の味を圓滿するが故に、猶し正道の如し、諸の群生をして智城に入らしむるが故に猶し磁石の如し、本願の因を吸ふが故に、閻浮檀金の如し、一切有爲の善を映奪するが故に、猶し伏藏の如し、能く一切諸の佛法を攝するが故に、猶し大地の如し、三世十方の一切如來出生するが故に、日輪の光の如し、一切凡愚の痴闇を破し信樂を出生するが故に、猶し君王の如し、一切上乘人に勝出せるが故に、猶し嚴父の如し、一切諸の凡聖を訓導するが故に、猶し悲母の如し一切凡聖の報土眞實の因を長生するが故に、猶し乳母の如し、一切善惡の往生人を守護したまふが故に、猶し大地の如し、能く一切の往生を持つ

が故に、猶し大水の如し、能く一切煩惱の垢をすゝぐが故に、猶し大火の如し、能く一切諸見の薪を燒くが如し、猶し大風の如し、普く世間に行せしめて得る所なきが故に、能く三有繫縛の城を出で、能く二十五有の門を閉づ、能く眞實報土を得しめ、能く邪正の道路を辨ふ、能く愚痴海を竭して能く願海に流入せしむ、一切智船に乘じて諸の群生海に浮ぶ、福智藏を圓滿し方便藏を開顯せしむ。

（教行證文類）

◎百千俱胝の劫をへて、百千俱胝のしたをいたし、したごと無量の聲をして、彌陀をほめんにあをつきし。

（和讃）

（附）　方便化身

方便門の機の見たてまつる佛は方便化身なり

◎謹んで化身土を顯さば、佛は無量壽佛觀經の說の如し、眞身觀の佛是れなり。

（教行證文類）

◎方便眞門の誓願について行あり、信あり、亦眞實あり、方便あり、願とは卽ち植諸德本の願是なり往生とは難思往生是なり、佛とは卽ち化身なり。

（教行證文類）

◎彌陀の報化は諸師今家の異解是なり、天台淨影已

下の諸師化身の義を立つ、高祖大師彼等の義を破し、諸經の文を引て報身の義を存す、其所論をいふに、本とこれ觀經の眞身の佛あり、しかるに今の如くんば、併しあから他家諸師の謬解に同じて、忽ちに今師指定の正義に背むく、己に眞身といふ何ぞ化身に屬せん、答これを解するに二義あり、一に云く、眞身觀の佛報身たる義置て論せず たゞ今の釋の意、別願酬因の報身土とは、身は これ念佛三昧の教主、土は又乘願所入の土あり しかるに彼眞身の佛體は、先づ觀門に約して說く

所の身あるが故に、眞實色身の名ありと雖も、もし念佛所見の身にのぞむれば猶は方便を帶ぶ、此の義邊に依て化身とあすか、二に云く、眞身觀の佛是ありといふは、これ彼の眞身の報佛をさして之を化身といふにあらず、眞身觀の眞身所共の化身を指すなり、眞身の本佛其觀門所見の邊に約する時は、化身に屬すと雖も、彼の念佛衆生攝取して捨てたまはざる益に約するときは、其實體は是れ報身なり、今化身とは、所謂經に云く、圓光の中に於て百萬億那由他恒河沙の化佛ありと、此の

化佛をさして眞身觀所說の化佛といふ、其眞身則ち化身なるにはあらず、此佛すなはちこれ下の九品の中の來迎の佛なり、これによりて玄義に同性等の三經の文を引て報身の義を證するに、觀經の文を引て卽ち釋成して云く、報身化を兼ねて共に來て手を授くと、此釋の中に報身といふは眞身の本佛、化を兼ねてとは彼の所共の化身これなり、問て云く、此の義疑あり、然らば眞身觀の中の化佛といふべきか、答ふ上に謹んで化身土を顯はさばと標す、その下の釋なるが故に重て牒せ

さるのみ、已上の二義の中第二の義穩便なり。

（六要鈔會本）

化身土といふは化身化土なり、佛といふは觀經の眞身觀にとくところの身なり、土といふは菩薩處胎經にとくところの懈慢界、また大經にとける疑城胎宮なりとみえたり、これすなはち第十九の修諸功德の願よりいでたり、たゝしうちまかせたる敎義には、觀經の眞身觀の佛をもて眞實の報身とす、和尙の釋すなはちこのこゝろをわかせり眞身觀といへる名あきらかなり、しかるにこれを

もて化身と判せられたる常途の教相にあらざ、これをこゝろうるに、觀經の十三觀は定散二善のなかの定善なり、かの定善のなかにとくところの眞身觀なるがゆへに、かれは觀門の所見につきてあかすところの身なるがゆへに、弘願に乘じ佛智を信ずる機の感見すべき身にあらざる義をあらはせり、これによりて聖人この身をもて化身と判じたまへるなり。

（教行信證大意）

第二節　極樂

第一項　極樂の意義

極樂の位置と名義

●法藏菩薩今已に成佛して現に西方にましまし、此をさること十萬億の刹あり、其の佛の世界を名けて安樂といふ。

（無量壽經）

●是より西方に十萬億の佛土を過ぎて世界あり、名けて極樂といふ。

（阿彌陀經）

●三塗苦難の名あることなし、たゞ自然快樂の音あり、この故に其國を名づけて安樂といふ。

（無量壽經）

●その國の衆生もろ〳〵の苦あることなし、たゞ諸の樂をうく、故に極樂と名く。

（阿彌陀經）

極樂國土の相狀

三塗苦難あかくとぢ、但有自然快樂音、このゆへ安樂とおづけたり。（和讃）

眞土といふは、大經には無量光明土とのたまへり、或は諸智土とのたまへり。（敎行證文類）

其佛國土には、自然の七寶、金、銀、瑠璃、珊瑚琥珀、硨磲、碼碯、合成して地とせり、恢廓曠蕩として限極むべからぢ、ことゝく相ひ雜則してうたゝあひ入間せり、光赫焜耀にして微妙奇麗あり、清淨に莊嚴して十方一切の世界に超踰ゆ、衆寶の中の精あり。（無量壽經）

極樂は眞實報土なり

彼世界の相を觀ぢるに三界の道に勝過せり、究竟して虛空の如し、廣大にして邊際あし。（淨土論）

安樂國土の莊嚴は、釋迦無碍のみことにて、とくともつきじとのべたまふ。（和讃）

謹で眞佛土を案ぢれば、佛は則ち不可思議光如來なり、土は亦これ無量光明土なり、然ればすなはち大悲の誓願に酬報するがゆへに、眞の報佛土といふなり。（敎行證文類）

汝ぢ當に生るべき處は、是れ阿彌陀佛の淸淨報土なり。（敎行證文類）

極樂は彌陀の願力と慈悲とによりて成ぜるなり

●眞佛土といふはまことの身土なり、すなはち報佛報土なり、佛といふは不可思議光如來、土といふは無量光明土なりといへり、これすなはち第十二、第十三の光明壽命の願にこたへてうるところの身土なり。（教行信證大意）

●佛土の不可思議に二種の力あり、一には業力、いはく法藏菩薩の出世の善根、大願業力の成ぜる所なり、二には正覺の阿彌陀法王の善住持力の攝する所なり。（往生論註）

●阿彌陀佛の國土の十七種の莊嚴功德成就は、如來自身の利益大功德力成就と、利益他功德成就とを示現したまへるが故なり。（往生論註）

●無緣これ大悲なり、大悲は卽ちこれ出世の善なり安樂淨土は此大悲より生ぜるが故に、此大悲を謂て淨土の根となす、故に出世の善より生すといふなり。（往生論註）

●安樂佛土の依正は法藏願力のなせるなり。（和讃）

第二項　眞實報土

極樂は報土にして化土にあらず

●謹で眞佛土を案ずれば、佛は則ち不可思議光如來なり、土は亦これ無量光明土なり、然れば則

ち大悲の誓願に酬報するがゆへに、眞の報佛土といふなり。

（教行證文類）

●眞佛土といふはまことの身土なり、即ち報佛報土なり、佛といふは不可思議光如來、土といふは無量光明土なりといへり、これすなはち第十二、第十三の光明壽命の願にこたへてうるところの身土なり。

（教行信證大意）

●問て曰く、今現在の阿彌陀佛は是れ何の身ぞ、極樂の國は是れ何の土ぞや、答曰く現在の彌陀は是れ報佛、極樂寶莊嚴國は是れ報土なり、然るに古より相傳へて、皆阿彌陀佛は是れ化身、土は亦是れ化土なりと云ふ、此れ大なる失とす。

（安樂集）

●問て曰く、彌陀の淨國は將たこれ報なりや是れ化なるや、答て曰く是れ報にして化にあらず、如何んぞ知ることを得る、大乘同性經の說の如くんば、西方安樂、阿彌陀佛は是れ報佛報土なり。

（玄義分）

●壽命無量の願成就これまた至要なり、そのゆへはたとひ念佛往生すといふとも、かの安樂淨土報

身報土にあらざれば、凡夫の出要にたらざるべし、しかれば四十八願酬因の正覺の阿彌陀、壽命窮盡の期あるべからざる條勿論なり、したがひてすなはちかの永無生滅の彌陀報身の所居の土、また報土たる義またもて勿論なり。（願々鈔）

◉報の淨土の往生は、おはからざるをあらはせる、化土にむまるゝ衆生をば、すくなからざるとおしへたり。（和讃）

◉眞實報土の正因を、二尊のみことにたまはりて、正定聚に住すれば、かならず滅度をさとるなり。

極樂の莊嚴は一切世界に超過す

第三項　無比の淨土

（和讃）

◉清淨に莊嚴して十方一切の世界に超踰せり衆寶の中の精なり。（無量壽經）

◉一切の佛土皆嚴淨なり、凡夫の亂想恐くば生じがたし、如來別して西方國を指したまふ、これより十萬億を超過せり、七寶莊嚴最も勝れたりとす（法事讃）

◉凡そ八方上下無央數の諸佛國の中、極樂世界の有ゆる功德もつとも第一とす、二百一十億の諸佛の

淨土の嚴淨の妙事を以て皆此中に攝在せり。

（往生要集）

●此は彌陀の本國四十八願なることを明す、願々皆增上の勝因を發す、因に依て勝行を起し、行に依て勝果を感成す、報に依て極樂を感ぜ。

（序分義）

●彼彌陀極樂界を觀ぜるに、廣大寬平にして衆寶成ぜ、四十八願莊嚴より起て、諸の佛刹に超へて最も精たり。

●安樂國土の莊嚴は、釋迦無碍のみことにて、とくともつきしとのべたまふ、無稱佛を歸命せよ。

（往生禮讃）

（和讃）

極樂國土の量相は廣大にして邊際なし

●安樂佛土の依正は、法藏願力のなせるなり、天上天下にたくひなし、大心力を歸命せよ。

（和讃）

第四項　方位廣狹

●恢廓曠蕩として限極すべからぜ。

（無量壽經）

●其國廣大にして、量虛空の如く齊限あることなし

（安樂淨土義）

●彼の世界の相を觀ぜるに三界の道に勝過せり、究竟して虛空の如く、廣大にして邊際なし。

極樂は西方にあり

妙土廣大超數限、本願莊嚴より起る。（淨土論）

安樂淨土の莊嚴は、唯佛與佛の知見なり、究竟せること虛空にして、廣大にして邊際なし。（和讃）

法藏菩薩今已に成佛して現に西方にまします、此を去ること十萬億の刹なり、其佛の世界を名けて安樂といふ。（無量壽經）

極樂の方を指し佛の身相を立つる所以

是より西方に十萬億の佛土を過ぎて世界あり、名けて極樂といふ。（阿彌陀經）

或は行者ありて、此一門の義をもて、唯識法身の

觀をなし、或は自性淨佛性の觀をなすは其意甚だ錯まれり、絕へて少分も相ひ似たることなし既に像を想へと言ひて三十二相を假立せるは、眞如法界の身豈相ありて緣すべく、身ありて取べけんや、而も法身は色なし眼對に絕へたり、更に類として方ふべきなし、故に虛空を取て以て法身の體にたとふるなり、今此觀門は等しく唯だ方を指し相を立てゝ、心を住せしめて境を取らしむ、すべて無相離念を明さゞ、如來はるかに末代罪濁の凡夫は、相を立て心を住せしむること尙ほ得ること

と能はじと知りたまへり、いかに況んや相を離れて事を求めん者、術通なき人の空に居りて舍を立てむがごとし。

（定善義）

●世俗の君子降臨し、勅して淨土のゆへをとふ、十方佛國淨土なり、なにゝよりてか西にある、總師こたへてのたまはく、わが身は智慧あさくして、いまだ地位にいらざれば、念力ひとしくおよばれぜ。

（和讃）

●問て曰く、或は人あり言く、大乘の無相彼此を念ぜること勿れ、若し淨土に生れんと願ぜば、すなはち是をもて相を取り轉た漏縛を增すべし、何をもつてか之を求めん、答て曰く、此の如き計は將に謂に然らじ、何となれば、一切の諸佛法を說くにかならぜ、二緣を具す、一は法性の實理に依る、二には須く其二諦に順ぜべし、彼は大乘の無念、たゞ法性に依ると計して然も緣求を謗りて無みす、卽ち是れ二諦に順ぜざるなり、此の如きの見は滅空の所收に墮す、この故に無上依經に云く、佛阿難に告げたまはく、一切衆生もし我見を起すこと、須彌山の如くならんも我れ懼れざる所

なり、何を以ての故とならば、此人は未だ即ち出離することを得ざると雖も、常に因果を壞せざ、果報を失せざるが故に、もし空見を起すこと芥子の如きも、我即ち許さず、何を以ての故なれば、此見は因果を破り喪ひて多く惡道に墮す、未來の生處に必ず我化を背く、今行者を勸む、理無生なりと雖も、然も二諦の道理一切を緣求して往生を得ることと無きにあらず、是の故に維摩經に云く、諸佛の國と及び衆生と空なりと觀ずと雖も、而も常に淨土を修して諸の群生を敎化す、又彼の經に

西方極樂に生ずる即ち無生の理にかなふなり

云く、無作を行ずと雖も而も現して身を受く、是れ菩薩の行なり、無起を行ずと雖も而も一切の善行を起す、是れ菩薩の行なり、是れその眞證なり

（安樂集）

問ていはく、佛道を行じて菩提をもとむるは生死をはなれんがためなり、しかるに往生を願ずるはなを生をもとむるにあらずや、是れ妄見なり如何

こたへていはく、龍樹菩薩は易行の道をすゝめて便はち彼の淸淨の土に往生することを得といひ、天親菩薩は五念門の行をあかして、安樂國に生ぜ

んと願ぜと判せり、それより以下三國の祖師、諸宗の高僧みな往生を願ぜ、もし淨土にゆくといふとも、生死をはなれざる義あらば、かくのごときの深位の大士、高行の智德なんぞ往生を願せん、末代無智の道俗、たゞ如來の說を信じ、先賢のあとをしたひて、ひとへに念佛を修し專ら往生を願すべし、あへて疑謗にをよぶべからざるものなりたゝしねてこの義をあきらめんとおもはゝ、繼師の論註をみるべし、かの釋にこのことを判ぜるに、あるひは凡夫の實の衆生實の生死ありとおもふが如くにはあらざといひ、あるひは彼淨土はこれ阿彌陀如來の淸淨本願の無生の生にして、三有虛妄の生の如くにはあらざ、何を以て之を云とならば、夫れ法性淸淨畢竟無生なり、生といふはこれ得生者の情なるのみといへり、されば往生といふは、凡夫の情量におはせてこれをいふことばなり、實の生死にはあらざるなり、他力の本願に乘じ、無生の名號を稱して、一乘淸淨の土に往生すれば、かの土はこれ法性無性のさかひなるがゆへに凡情には生ぜとおもへば自然に無生の

理にかなふなり。

第五項　無爲涅槃界

（顯名鈔）

彼の佛の國土は、清淨安穩にして微妙快樂なり、無爲泥洹の道にちかし。（無量壽經）

娑婆は極めて苦にして生處にあらず、極樂は無爲實にこれ精なり。（法事讚）

極樂は無爲涅槃界なり、隨緣の雜善恐くは生じ難し、故に如來要法を選んで、敎へて彌陀を念せしむること、專にして復た專ならしむ。（法事讚）

極樂無爲涅槃界といふは、極樂とまふすはかの安樂淨土なり、よろづのたのしみつねにして、くるしみまじはらざるなり、かのくにをば安養といへり、曇鸞和尙ははめたてまつりて、安養とまふすとのたまへり、また論には蓮華藏世界ともいへり無爲ともいへり、涅槃界といふは、無明のまどひをひるがへして無上覺をさとるなり、界はさかひといふ、さとりをひらくさかひなりとしるべし。（唯信鈔文意）

問ていはく、樂といふは苦に對することばなり、苦はすなはち樂のよるところ、樂はすなはち苦の

極樂は無爲無漏の涅槃の界なり

ふするところなり、その体をたづぬるに實体なしされば苦にあらぎる樂にあらざるを、捨受となづけて樂受よりはまされりとす、いはゆる色界四禪のうち、三禪までは樂受、第四禪は捨受なり、すでに三界有漏の果報のうちに、なを下地は樂受、上地は捨受なり、しかるにいま浄土無爲のさかひにをひて、なんぞ樂をきはむといはんや、もし樂をきはむといはゞ、かへりて有漏の果報に同すべきや、答て曰く、曇鸞和尚の註論をみるに、樂に三種あり、一には外樂、いはく五識所生の樂、二には内樂、いはく初禪、二禪、三禪の意識所生の樂三には法樂樂、いはく智慧所生の樂なり、此の智慧所生の樂は佛の功德を愛するより起れりといへり、このなかに外樂といへるは欲界の樂なり、内樂といへるは色界三禪の樂なり、第四禪の捨受は三禪の樂よりはいさゝかすぐれども、たゞ三界のうちの勝劣なるがゆへに浄土の樂にはことなり、されば善導和尚三界の苦樂を釋せらるゝとき、苦は則ち三塗八難等、樂は則ち人天五欲放逸繫縛等の樂なり、これ樂といふと雖も然も是れ大苦、必

竟して一念眞實の樂あることなしといへり、三界のうちの樂はまことの樂にはあらざるなり、法樂といへるは、念佛の行者についていへば、いまだ穢土にありて凡身をすてざれども、內に智慧と相應して虛僞ならぜ顚倒ならぜ、いはんや淨土にしてうくるところの樂は、法性に隨順せる眞實無爲の樂なり、大經にはたゞ自然快樂の音のみあり、是の故に其國を名けて安樂といひ、これを釋するには、あるひは法性の常樂ともいひ、或は寂靜無爲の樂ともいへり、これすなはち涅槃經にいふ

ところの涅槃の大樂なり、かの經には、涅槃の性は苦なく樂なし、この故に涅槃を名けて大樂とすといへり、涅槃の樂と淨土の樂と一なりとは何をもてか知るといふに、彌陀の妙果を號して無上涅槃といふともいひ、極樂は無爲涅槃の界なりとも釋するがゆへなり、衆生は樂をねがふこゝろあるがゆへに、極樂の名あれば、かれをねがふこゝろあるべし、生れんと願ふこと何の意ぞ切なる、正しく樂きはまりなきが爲めなりといへるはこのこゝろなり、快樂のためにきゝてねがひ、ねがひて

かの生因をたづね、たづねて念佛に歸し、歸して淨土に生し、生じぬれば無生を證し涅槃のさとりをひらくがゆへに、かのさとりにかなひぬれば無苦無樂のくらゐにいたる、すなはちこれを大樂となづくるなり、大樂と極樂とその義これおなじ。

（顯名鈔）

方便化土

（附）

方便門の機の趣入する土は化土なり

謹んで化身土を顯さば、佛は無量壽佛觀經の說の如し、眞身觀の佛是れなり、土は觀經の淨土是れなり、復菩薩處胎經等の說の如し、卽ち懈慢界是れなり、亦た大無量壽經の說の如し、卽ち疑城胎宮是なり。

（教行證文類）

今方便眞門の誓願に就て行あり信あり、亦眞實あり方便あり、願とは卽ち植諸德本の願これなり、往生とは此れ難思往生これなり、佛とは卽ち化身、土とは卽ち疑城胎宮これなり。

（教行證文類）

化身土といふは化身化土なり、佛といふは觀經の眞身觀にとくところの身なり、土といふは菩薩處胎經にとくところの懈慢界、また大經にとける疑城胎宮なりとみへたり、土は懈慢界といひ、ま

た疑城胎宮といへる、そのこゝろをゑやすし、ふかく罪福を信じ、善本を修習して不思議の佛智を決了せゞ、うたがひをいだける行者のむまるゝところなるがゆへに、眞實の報土にはあらぜ、これをもて化身土となづけたるなり、これわが聖人のひとりあかしたまへる教相なり。（教行信證大意）

本師源信和尚は、懷感禪師の釋により、處胎經をひらきてゞ、懈慢界をばあらはせる。（和讃）

七寶講堂道場樹、方便化身の淨土なり。（和讃）

第三節　名號

第一項　名號の意義

名號の成就

この第十七願のこゝろは、法藏比丘、あまねく名號をもて衆生をみちびかんとおほして、まづわか名を諸佛にほめられんとちかひたまへり、すなはち願成就の文にのたまはく、十方恒沙の諸佛如來みなともに、無量壽佛の威神功德、不可思議なるを讃嘆したまふとのたまへり。（願々鈔）

名號の謂ひ

（一）機法一体のいはまあり

このゆへに南無と歸命する機と、阿彌陀佛のたすけましまする法とが、一体になるところをさして機法一体の南無阿彌陀佛とはまうすなり。（御文）

（二）願行具足のいはれあり

●夫れ南無阿彌陀佛と申は、いかやうなるこゝろぞなれば、まづ南無といふ二字は、歸命と發願回向との二の心なり、また南無といふは願なり。阿彌陀佛といふは行なり、されば雜行雜善をなげすてゝ、專修專念に彌陀如來をたのみたてまつりて、たすけたまへとおもふ歸命の一念をこるとき、かたじけなくも遍照の光明をはなちて行者を攝取したまふなり、このこゝろずなはち阿彌陀佛の四の字のこゝろなり、又發願回向のこゝろなり。

（御文）

名號の德

名號は衆生

●名號はこれ萬德の歸するところなり、然れば則ち彌陀一佛の所有の四智、三身、十力、四無畏等の一切の內證の功德、相好、光明、說法、利生等の一切の外用の功德、みな悉く阿彌陀佛の名號の中に攝在す。

（選擇集）

●我が彌陀は名を以て物を攝す、是を以て耳に聞き口に誦へは、無邊の聖德識心に攬入し、永く佛種となり、頓に億劫の重罪を除き、無上菩提を獲證る。

（教行證文類）

●眞實の行といふは、ささの敎にあかすところの淨

の往生をとぐべき行体なり

土の行なり、これすなはち南無阿彌陀佛なり、第十七の諸佛咨嗟の願にあらはれたり。

（教行信證大意）

本願の名號は正定業なりといふは、第十七の願のこゝろなり、十方の諸佛にわが名をほめられんとちかひましく〳〵て、すでにその願成就したまへるすがたは、すなはちいまの本願の名號の体なり、これすなはちわれらが往生をとぐべき行體なりとしるべし。

（正信偈大意）

彌陀の名號

問て曰く、普く諸願に約して、麤惡を選びすてゝ善妙を選び取ることと其理然るべし、何が故ぞ第十八の願に、一切の諸行を選すてゝ、唯偏へに念佛の一行を選び取て往生の本願となしたまふか、答曰く聖意はかりがたし、たやすく解する能はぞ、然りと雖も今試に二義を以て之を解せん、一には勝劣の義、二には難易の義なり、念佛は是れ勝餘行は是れ劣なり、ゆへは如何、名號は是れ萬德の歸する所なり、然は則ち彌陀一佛の所有の四智三身、十力、四無畏等の一切の内證の功德、相好光明、說法、利生等の一切の外用の功德、皆こ

を稱ふるのみを以て衆生往生の行と選定したまひし所以

とぐく阿彌陀佛の名號の中に攝在す、故に名號の功德最も勝れたりとす、餘行は然らず、各一隅を守る、是を以て劣となす、譬へば世間の屋舍の如し、名字の中に棟梁椽柱等の一切の家具を攝すれども、棟梁等の一々の名字の中には一切を攝すること能はず、之を以て知るべし、然れば則ち佛の名號の功德は餘の一切の功德に勝れたり、故に劣を捨て勝を取て以て本願となしたまふか、

次に難易の義とは、念佛は修し易く、諸行は修し難し、是の故に往生要集に問て曰く、一切の善業各利益あり、各往生を得、何が故ぞ唯念佛の一門を勧むるや、答て曰く、今念佛を勧むることは、是れ餘の種々の妙行を遮せんとにはあらず只是れ男女貴賤行住坐臥をえらばず、時處諸緣を論せず、之を修するに難からず、乃至臨終に往生を願求するに、其便宜を得ること念佛に如かざればなりと、故に知りぬ、念佛易きが故に一切に通ぜず、諸行は難きが故に諸機に通ぜず、然らば即ち一切衆生をして、平等に往生せしめんが爲めに、難を捨て易を取て本願となしたまふか。

念佛には信心あるを要す信心の体は卽ち名號なり

●信心ありとも、名號をとなへざらんは詮なく候、また一向名號をとなふとも、信心あさくば往生しがたく候、されば念佛往生とふかく信じて、しかも名號をとなへんするは、うたがひなき報土の往生にてあるべくさふらふなり、詮ずるところ名號をとなふといふとも、他力本願を信ぜざらんは邊地にむまるべし、本願他力をふかく信ぜんともがらは、なにごとにかは邊地の往生にて候べき。

（選擇集）

（末燈鈔）

名號には願と行と具足せる謂あり

●彌陀をしかと御たすけ候へとたのみまいらすればやがて佛の御たすけにあづかるを、南無阿彌陀佛とまうすなり。

（御一代記聞書）

●信心は體名號にて候。

（御一代記聞書）

第二項　願行具足

●南無と言は卽ち是れ歸命なり、亦是れ發願回向の義なり、阿彌陀佛と言は卽ち是れ其行なり、斯の義を以ての故に必ず往生を得。

（玄義分）

●發願回向と言は、如來已に發願して衆生の行を回施したまふの心なり、卽是其行と言は、卽ち選